

ヨブ記の手記

森惠一

はじめに

11月後半に再開と書きましたのに、もう12月になってしまいました。ちよつとばたばたしていて、というのは理由になりませんが、続けて書いているということの意義を思わせられています。見てくださっている方にとつてというだけでなく、もともとブログですから、自分自身のためにと取り組んでいたものでした。ともかく、再開します。新約は何とかめどが立つてきました（黙示録という大物が控えています）。旧約は大きなものがいくつも未着手なので、はたして聖書全巻にいたり得るかどうか。それで、どうしようかと考えまして、ヨブ記を読むことにします。かなり冒険ではあるのですが、ここしばらくジュニアみことばの光でヨブ記を読んでいて、自分なりにちゃんと向き合ってみる必要性を覚えさせられましたので。明日からとします。

ヨブ記 1:1

ヨブ記は様々な解釈があり得ると、よく言われる。人の書き記した文芸作品なら、読み手の思い次第でどのように受け取っても良いのだが、神が人に与えられた書であることを思うと、そうそうバラバラで良いのかどうか。あるいは、様々あり得る良いということを神ご自身が意図して提供しておられるのだとしたら、それもまた、この書の理解において、かなり重要な土台になるはずとも考える。そんな聖書論的なことも含めつつ読み進めることになりそうではある。ちなみに、解説書の類は基本的に用いずに読むことにするので、誰かの編み出したヨブ記理解の路線ということは考えずに、となる。似通っていくこともあるだろうし、少々荒唐無稽に思われる場合もあるだろうが、少なくとも、書かれていることそのものに沿って思索すればという前提を保つていられるのではないかと願いつつ。

ヨブ記 1:1

ヨブ記については、ここに書かれているのが実際に起こったことか、それとも寓話のようなものか、ということが取り沙汰されている。実際に起こったこと、という見方は、新約での言及があることに関連するようだが、寓話であつても例として利用することは大いにあり得るので、その懸念は無用だろう。それから、いわゆる歴史書とは明らかに異なるものなので、ヨブ記を寓話とみただけからといって、聖書の大半が告げている事柄の歴史性、実際性に支障を来すわけでもない。むしろ、事実を書き留めたというふうに読もうとすると、友人たちとの論議も逐一その通りの言葉を語つたのだと見る必要が生じて、ということとは誰かが速記していたということにもなり、無理が生じて、ということとは誰かからなかなか異質である。神はこの書に示したことを通じて人々に何かを指し示してくださつたのだということも踏まえていれば、実際に何が起こつたのか、あるいはまさに寓話であるのか、ということは、さほど重要な話ではない。むしろ、聖書を神の言葉とは受け止めずに人間たちの思想だと見る場合のほうが、ここにあることが現実なのかどうかは重要になる。人間の思想に過ぎなくても現実ならば意味があるが、思想に過ぎずかつたのだの寓話なら、ここにあることから真理を見出す努力が必要かどうか、という話にもなつてしまう。しばしば、聖書を神の言葉と認める立場ほどにこれを事実とすべしと考える様子があがるが、食い違つているように思える。△br />△br />

ヨブ記 1:1

前置きのことを続けていたが、理解に関する様々なことはその時々に見ていくことにして、読み進めることにする。ヨブはウツという場所にいた人だつたと紹介されているが、その正体は今ひとつ明瞭で

はない。哀歌¹⁰からすればイスラエル南方地域を指すようだが、地名というのにはよほどはつきり示されていないと、似たようなものは様々出てくるので、何とも言えない。アブラハムからバビロン補囚まででも1500年ほどにはなるので、それぞれの時代によつて、その名で呼ばれている場所が異なる可能性もある。ヨブ記自体がいつの時代を描いているのかも明確ではない。ただ、ウツの人として語られていることからすれば、彼はイスラエル人ではないのだろうとは推測される。このあたりも、ヨブ記はあえてこの人の正体を明確にはせずに、読み手が漠然と受け止めることを意図したのだと考えられる。「昔々あるところに…」と語られるのにも近い。それでも、この書の告げようとしていることには何ら支障がないのだが。

ヨブ記 1:1

ヨブがイスラエル人ではない可能性を考えると、後の時代の人々がイスラエル人が異邦人かという区別を重視するようになったこととの認識のずれを見ることが出来る。もともと旧約には、イスラエル人ではない人々の中にも主なる神を崇拜する人々はいくらでもいたこと、その人たちがそれぞれの集団の中で必ずしも疎外されていた様子もないことが記されている。預言者たちも新約も、人々の考えるそういう分断を修復するようなことを語り示していくのだが、それはつまり人々が、神の御心とは関係なく、勝手に分断したことだからくる問題だつたということにもつながるだろう。今日の私たちはしばしば南王国こそが正統と考えるだが、旧約自体は北王国が明らかに神の民として扱われていることを示しており、それもまた、人が勝手に切り分けているもの一つと言える。愚かなことであるのだ。

ヨブ記 1:1

それで、ヨブは誠実な人であつたこと、神を恐れる者であつたことが明示されている。これは後々の論議に深く関わることであるが、直後に出てくる話からも、その誠実さがヨブの勝手な思い込みではなく、神ご自身が認めてくださつていた部類のものであつたことが告げられている。言うまでもなく、人は誰でも罪深き者であり、決して神の前にきよいとは言えない。でも、そのことは別に神はしばしば人々のことを、良きものとして肯定してくださつていられることも忘れてはいけない。自らの罪深さを悔いること共に、そんな者たちがまがりなりにであつても神の前に誠実な歩みをなしえる幸いを感謝することも重視すべきなのだ。

ヨブ記 1:24

人は少々考えすぎるのだが、ここには単純に、神の祝福が豊かさとして語られている。多くの子どもたちと、それからたくさん財産でいられている。この後の出来事においても、ヨブたちのこういう暮らし方が何か不道德だとか、思い上がりだとか、そんなふうには全く語られていない。人類がしばしば富を悪の機会としているのは事実だが、どのような富でも何でも、それを健全に楽しむことはできるし、神はそれを肯定しておられるということは忘れないでいたい。それを否定するのは、神の御業を拒むことにもなりかねず、それこそ救いについても「私は御子の犠牲など受け取れる資格はない、救われるべきではない、滅びるべきだ」と拒むことになってしまう。神はそんな態度は全く求めていない。

ヨブ記 1:5

ヨブは子どもたちのためにとりなしの祈りを続けていたと書いてある。

話の流れからすれば、彼のこの態度は肯定的に語られていると言つて良い。つまり、彼が正しい人であつたことの実例として語られている。ヨブが子どもたちのことを断罪したわけではなく、何かの罪を認めて悔い改めたわけでもないことは注目に値する。罪について真剣に意識する時に、しばしば大半の者たちは、自分のどこが悪かつたのかと「犯人捜し」的なことに必死になる。でもそれは神の前に健全とは言いがたい。むしろ人は罪深い存在だから、掘り起こしていくならばいくらでも出てくる。尽きることはない。けれど、それを続けていたら、神の前に存在そのものを否定すべきという思いにしかならない。罪を告白すること、罪を赦されていることを喜ぶことと、それから、こんな者がしかし神から祝福を与えられて生きていることを楽しむことと、この三つはいつも同時に存在すべき姿勢である。

ヨブ記 1:5

ヨブがしていたことについて、もう少し考えてみよう。彼は子どもたちの具体的な罪を指摘しているのではない。彼の祈り、彼の願いは、人という存在が罪深い者であること、罪に対して弱い者であること、だからこそ、いつでもその奴隷になつてしまう者であることを理由としている。それだからこそ、何か具体的な過ちがあつたかどうか、あるいはそれを自覚しているかどうかにかかわらず、人は常に神に祈り、助けを求めて行く必要がある、そういう姿勢の表れである。イスラエルの大祭司が、年に一度、民全体の罪のためのささげ物をしていたのも同類の行動だ。一般に、罪の解決には本人の自覚的な悔い改めが必要と言われる。その趣旨は分かるし、大事なことはあるが、同時に聖書は、本人が悔い改めたから赦しがあるということではなく、それをほめるかに超えた神の救いの御業があることをも語つていることを、心に留めておきたい。

ふさわしい。

ヨブ記 1:6-8

ヨブに関するここまでの語りは、8節の前提となつてゐる。神はヨブのそのような姿勢を認め、また、歓迎してゐたと言ふことである。言うまでもなく、ヨブとして完全ではない。そんな話をするつもりも、この書にはない。大事なことはヨブが神の御心になう歩みをしてゐたということである。完全かどうかではなく、欠けがないかどうかでもなく、である。人は、一点のシミもないかどうかを問題視する。でも神にとつての喜びは、そこにシミがあるかどうかではなく、その人が神を求めて、神に寄り頼んで生きてゐるかどうかであるということを考えないと、ヨブ記の話の進み具合を受け止めることができないだろう。

ヨブ記 1:6-7

ヨブ記はある種の寓話として語られてゐるということを考えさせられるのは、このような箇所からでもある。サタンが神の前に出てきて、そこで平常的に語り合うなどと言ふことは、聖書全体の指し示すものとは明らかに異なつてゐる。さらには、この後に出てくるように、神がサタンに許可を与えて、人を苦しめることがあるという話の筋も、神の本質からすればあり得ない話である。そして、このあたりの話は、最後までヨブに対しては何も説明されていない。この書は、理由が分からないような苦しみに遭遇する人間たちが、それをどう受け止めていくのか、どう葛藤するのかを語ることにある。その際に、ヨブ自身には何一つ理由、原因はなかつたのだということも冒頭で明示する必要があると考えた著者が、こういう場面設定をしたのだ。だからこのあたりの箇所から、サタンの動向についてとか、あるいは神の行動を読み取りすぎるのは、かえつて危険である。ヨブは悪くはなかつたのだ、という一点に集中してゐたほうが、語られてゐる筋道を受け止めるのには

ヨブ記 1:6-12

サタンがこんなふうにして神と駆け引きをすることはあり得ない。ただ、サタンの意図することについては興味深い指摘ではある。人はしばしばサタンを支配者のように考える。市居の人々が王などの権力者に逆らえないように、サタンの力に押しつぶされてゐるという観念を持つ。だが聖書はサタンにそこまでの強さは認めてゐない。サタンの行動は誘惑であり、人を自らのほうに引き寄せて、共に滅びていかせようとするところにある。それは単なる支配よりも深刻であるが、理由はサタンの行動の結果、人が罪を歩むとすれば、それは仕方がなくではなく、人が自ら選び取つたものでもあるからだ。攻撃に對する有効な防御は、攻撃の種類を的確に見定めることが欠かせない。サタンの行動が誘惑であり、たぶらかしであるとするれば、そして人間がそれに対して弱いのだとすれば、対抗策は神に寄り頼み、神によつてこそ満たされていくことであろう。サタンを撃滅することではなく、神の祝福を精一杯喜んで生きていくことこそが、愚かな道へと落ちていくことから私たちを守つてくれる。エデンでも神は、そのような道筋を与えてくださった。人はそれを捨ててしまつたのだが。

ヨブ記 1:8

場面設定の幕なので、神がヨブのことをサタンに自慢してゐるような言い方になつてゐるが、むしろ神はそんなふうにはなさらない。ただ、神が人という存在を大切なものとして受け止め、その歩みが健全である時にそれを大いに喜び、楽しんでおられることは、この場面設定に反映されてゐると言えるだろう。人は罪深い者であるが、そして神は罪を拒まれるのだが、それでは人は神の温情の中でかろうじて生き

残っているだけの、見捨てられた存在なのかと言えば、決してそうではない。神は人を喜び、人の姿を見て楽しむ。そういう歓喜も、聖書には語られ続けているはずだ。それは完全だからではない。様々な過ちがあり、欠けがある。それでもなお、人が誠実に生きていこうとする時に、神はそれを喜び迎えてくださっている。だからこそ、ヨブと神との関係においては、彼が罰を受けて苦しむべき理由は何一つないのだと、この書はまずそう語る。

ヨブ記 1:9-12

サタンの言い草は、まさに人間たち自身のものである。神が祝福してくださればその御心に従ってやろう、そうでなければ悪に生きてやろう、と。正しい生き方を神のため、と言ってしまうことが深刻な過ちである。確かに神はそれを望んでいる。だがそれは神の満足のためではなく、神の意図する秩序のためでもない。それは人自身、そしてこの世界にとつての幸いだからだ。それを、見返りがなければ悪に走ろうと言うのはコンビニ強盗が包丁を出して、「金を出せ、出さなければここで俺様の腕を切り落とすぞ」と脅しているようなもの。愚かすぎる。だが、こういう言い草が人の世では横行している。とりわけ、神に対して。ヨブ記は、この主張が全く無意味であることを主張していく。

ヨブ記 1:9-11

ヨブ記はこの主張をサタンに語らせているが、昨日述べたように、これは人自身が持っているものだ。この箇所から、そういう人の言い草の由来をサタンに求めようとするのは責任逃れだろう。サタンは確かに問題であり、深刻であり、悪である。だが、人の罪はサタンのせいではない。それは人自身が選び取ったもの。サタンの惑わしをしなければうまく行く、などということはありえない。

ヨブ記 1:12

サタンからの挑戦に、神が応じておられるような場面が語られている。が、実際には神はそのようなことはなさらない。サタンとまともに対決などなさらないし、まして、挑発に応じることなどありえない。サタンは神と対決しているつもりかもしれないが、聖書に見る限り、対決しているのはせいぜい御使いであつて、神が乗り出してこられたら、サタンには微かな抵抗すらできるものではない。そのような相手と真面目に対決するはずもない。さらには、ヨブをもたえてサタンと賭をすることなどもありえない。このやりとりは、意味の分からない（少なくともヨブにとつて）苦しみが襲いかかることがある、という話を設定するためである。そしてだから、ここにある神とサタンの対決については、結局、何も決着はつけられていない。この書が問うのは、サタンの話ではなく、人は神の前にどうあるのか、だからだ。

ヨブ記 1:12

ただの設定であつても、譲れないことがあるようだ。この1:15節、そして2:9でも、サタンの行動は神の許可する範囲の中、ということになっている。サタンが好き勝手なことをして、神の領域を荒らしているわけではない、ということだ。話の筋としては、許可制という要素を持ち込まなくても成り立つのだが、ヨブ記を書いた人は、そこまでサタンを野放しにするような話はできない、と考えたのだろう。もつとも、財産を奪うとか、あるいは病気になるとか、それを神が許可するという設定についても、現実からは離れている。神はそんなふうにして人をもたえておさんだりはしない。ただヨブ記の最後まで読んでいくと、すべてのことは神の御手の中にあり、神は一切を掌握されている、というテーマは貫かれている。だとしたら、苦しみに遭ったときに人はどうするのか、神

を恨むのか、それとも、ということについては、後々、考えていかねばならないのだが。

ヨブ記 1:12

この許可の場面は、様々な痛み、苦しみに遭った人が、自分の状況は神が意図されたことなのだ、というふうに誤解される危険性がある。聖書全体を読むときに、そんなことはありえないのだとはつきり分かるのだが、ヨブ記だけを読むとする人もあるかもしれない。もしもこれが教えを説くための教科書だったら、こんな表現は決して使わなかったであろう。教科書は、一ページだけを開いても間違った理解を誘発するような書き方は厳に避ける。でもヨブ記は違う。これはこの長い物語全体を通じて、人々に問い掛け、あるいは苦しむ人々に寄り添うことを意図して物語られているものだ。この後、様々な思惑が飛び交うようになる前に、そのことをしっかりと確認しておきたい。

ヨブ記 1:13-19

財産を奪つて良い、という許可が下りると、サタンはヨブの財産を奪うだけではなく、使用人たちの命までも奪っている。若い者たちは、当時の感覚ではヨブの所有物と見なされているのだが、でも、ヨブがそんな感覚で受け止めたとは思えない。ものが壊されたのではわけが違いう。そして、子どもたちが全滅する。子どもは親の所有物、確かにそういう観念はある。でも、そうはいかない。どんな時代でも、ある。けれど、場面設定として見る時、サタンの行動はまさに人の心の奥底を貫くものであるのがわかる。そう、大切な財産、決して手放したくない財産とは、ただの財宝ではない。それは人であり、家族であるのだとヨブ記は語っている。もしかすると普段忘れていくかもしれない。でもこの書を読むのは、そしてヨブの嘆きを見る者は、確かに、と納得する

はずだ。私にとって最も大切なのは、そこにいる人々の存在なのだ。この攻撃は、実は我が身を切り裂かれるよりも厳しい。サタンはそうとは気づいていないというふうを描かれているのだが。

ヨブ記 1:20-22

とても有名な言葉であり、この語り方からヨブの信仰姿勢を評価する人も多いだろう。だがこれを、神がなさることならば黙って受け入れます、という意味合いにしてしまうと、この信仰の本質とはずれがあるように感じられる。何があつても文句を言わない、そんな絶対服従的なことを神は求めている。それは聖書の語る信仰ではなく、神を愛することでもない。ヨブが真に「正しい」人であつたなら、この言葉はむしろ、一切を掌握している神に向かつて、だからこそあなたに委ねるのみです、と言っているのに等しい。あなたを信じています、あなたの権威を認めています。だからこそ頼れる相手はあなたのみ、あなたが何とかしてくださらないければ、どうにもなりませんのですから、と。それとも、神を拒み、神に反抗して、そうやって唯一の希望を壊してしまうのか。それはあり得ない。ただ、人はしばしばその最大の愚かさ

ヨブ記 1:22

ここで言う罪とは、神に対して愚痴をこぼすこと、なのだろう。愚痴をこぼすことを神が拒絶されるのかどうか、とは思わが。22でヨブの妻が言うように、神をのろい、神に暴言を吐き、ということだろう。でも、そんなことをしてみても何の意味もないとヨブは知っていただろう。それでもなお、自暴自棄になつてしまうこともあるのは、人の事実だ。ヨブはそうしなかつた、と書いてある。この言葉は、ヨブは立派だつたと言うよりも、惨状に直面した際に人に残されている唯一の希望へと、私

たちの思いを誘っているように思う。

ヨブ記 2:10

この場面も、非常に舞台じみたもので、この後に来る「苦しみについての議論」を引き出すための設定であることを、強く意識させられる。細かく見ていくと、こんなことはありえないと言わざるをえないことが出てくる。サタンが神をそそのかすなど、微塵もあり得ることはない。しかしその点についてはすでに述べた。舞台を形成する場合には、大げさな設定は必要な場合もある。それよりむしろ気になるのは、身体の痛みは所有物を失うことよりもつらい、というサタンの言い分である。一般的には、この比較はなるほど思いやすいのかもしれない。だが、本当に追い込まれた場合に、はたして人はそんなふうに応ずるのだろうか。ヨブは子どもたちを失っている。もはや彼にとつて慰めは何もないのだ。若い者たちだつてそうである。大切な人々のためには我が身を犠牲にしても、と言うことも大いにあり得る。サタンの言い分は薄っぺらである。むしろこれは設定である。つまりは、人が抱えることになる苦しみは、その原因を見出そうとしても、確かなものは出せない、という、後の議論が提示することにもつながる。

ヨブ記 2:7-10

幸いを受けるのだから災いも受けるべき、というヨブの言葉は、その比較よりも「神から受ける」という点にこそ注目すべきだと思う。単なる比較なら、良いことと悪いことは両方あつて釣り合いが取れる、という話になる。その論理では、神から豊かに祝福されたとしても喜んではいられない。次に悪が訪れるのは必定、ということなのだから。感謝などしなくてもいい、後から奪われるのだから、そういうことになつてしまふ。こんなのは神の恵みに対する冒瀆である。むしろこれは、神に

委ねるしかない、という意思表示である。神が関わつておられる、神がこんな状況の中でもなお働いておられる、だとしたら、苦しみがあつても、いや、だからこそ神に祈り、神を求めろしかない。それを、神を呪つてしまえというのでは、最後の頼みの綱を、自ら切り捨ててしまつことになる。あまりにも「愚か」である。

ヨブ記 2:9

ヨブの妻は、夫に死がもたらされることを願っている。彼女が冷たいということではないだろう。苦しみ続ける夫を見かねて、もういい、もう十分だ、早くその苦しみから解放されて欲しい、そういう意味合いでの「死」なのだと思える。彼女はヨブと共に生きてきた人なのだ。その敬虔を共に歩んできた人なのだ。でも、彼女の言い分は何の解決にもならない。もし、死が何かを終わらせてくれるのだとしたら、それは神の御手のよつてそのように導かれた場合の話である。神の手によつてこの苦しみがあるのだとしたら、死によつても神から逃れることなどはできない。そしてまた、死んでおしまいにしてしまつたら、神に向かつて、助けてくださいと祈り願う機会をも手放すことになる。妻の言い分は、感覚的にはよく分かる。それでも言わねばならない。それは違つ、と。

ヨブ記 2:11-13

いよいよ、ヨブと友人たちとの間で、苦しみに関する論議が始まつていく。この議論の仕方でもまた、苦しみの直面している人のもとは言いがたいし、ここまで「友人」たちがひどい人とは思えない。だが、人々に考えさせるための材料を提示する作品なら、このくらいは当たり前である。その一方で著者は、この友人たちが深くヨブを思っていること、彼と共に痛み、彼と共に悲しみ、その苦しみを一緒に担おうとしてい

たことを書き記している。ヨブの回りにいるような人たちは、決して邪悪ではない。そういう設定になっている。現実世界は違いかもしれない。追い打ちをかけ、せせら笑う者も多いだろう。でもそれでは、苦しみについて真剣に論議することなどできない。ヨブ記は、真摯な友人たちを登場させた。ここからの議論は、劣悪な攻撃ではないのだということを示唆する設定である。

ヨブ記 3:1-10

ここから始まる様々な言葉は、一連の流れを無視して、その言葉だけを讀むならば、それなりに納得できたり、人生教訓的に意味のあるものもたくさん出てくる。そういう意味からも、ヨブ記の言葉は様々に引用されることは多い。だが、これは一つの書である。そして、一つの目的をもつて書かれている。ということは、その言葉が単体ではどれほど意義のあるものだったとしても、困難に直面している人自身にとつては、必ずしも合致しない、時にはむしろその傷を押し広げ、間違つたほうへと押しやる可能性もあるのだと、そのようなことを考えつつ讀んでいくのが良さそうである。

ヨブ記 3:1

ヨブは襲いかかった苦しみに打ちのめされていた。友がやつてきても何も言えない状態だった。それが「日目になつて、要約彼は口を開いたということである。とすると、友の来訪には意義があつたのだ。彼らはまた何も語っていない。いや、語っていないからこそ、ただひたすら、そばに友がいるという、それがすべての状態である。そしてそれが効果があつた。語り始めたことは、この事態に向き合っていくためには意味のあることだ。彼らの存在は、確かにヨブにとつて役に立っていたということである。この後の議論は混乱している。それでも、黙り続けているよ

りは、真剣になつて取り組み、真実を見定めようと走り出したヨブの姿は、大いに意味がある。

ヨブ記 3:11-10

絶望を覚えるとき、人は暗黒を求めのかもしれない。本来は、暗黒の中で光を求めるものだろうが、でも、どうすることもできなくなると、光をすら拒んでしまう。それは間違っているし、何の解決にはならない。でも、それが人の現実であることを、ヨブ記を讀んでいると、私たちは思い出させられる。これを持ち越えて行くには、よほどのものが必要で、一部の人たちは、それこそ悟りを開いて、苦難の耐える心を持ち得るのかもしれない。でも大半の者たちはやはり、座して、崩れ落ちる。ヨブ記冒頭の神とサタンの会話は、(それ自体は現実ではないけれど)人とはどのようなものか、苦しみに耐えうるものかどうかを語っていた。ヨブ記は言う。人にはそれはできないのだと。

ヨブ記 3:11-19

ヨブはうめいている。ここに書かれている言葉は、正しいかどうかという論議にするならば、決して同意するわけにはいかない。彼はようするに、生まれなかつた方が良かった、あるいは、生まれてもすぐに死んでしまつた方が良かったと言っているのだから。人生論としては、この言い分を肯定することはできない。それは自分だけでなく、様々な苦しみの中にいる人たちの人生と存在を否定するものにもなつてしまふ。だが、ヨブ記はそういう意図でこの言葉を記しているわけではない。もつと単純に、ヨブのうめきを書いているのだ。うめかずにいられない彼の心境を表現しているのだ。対処できない苦しみ、理解できない苦しみは、人を圧倒する。それに対抗できる者はいない。私たちは、ひたすらに、ヨブのうめきを黙つて聞いているしかない。それは、この世に生き

る多くの人々のうめきでもあるのだから。

ヨブ記 3:14-15

ヨブは成功を収めた人であった。豊かな財産を持ち、満ち足りた日々を過ごしていた。彼はそれが神からの賜物であることを知っていたので、決して思い上がらず、常に感謝の思いを持って歩んでいたのだ。だが、ここに至って彼は言う。自分の歩んできた日々などは、神を神とも思わないこの世の権力者たちが築いてきたものと、何も変わりはないのだ。と。論理としては、それは違う。彼が手にしていたものと、王たちのそれは全く違う。神にあつて繁栄を喜び、与えられたものを樂しむのは善であり、幸いである。だが、どれほど満たされていたとしても、人はもしそこで、大切なものを失つてしまふならば、一切は瓦解したとしか思えなくなる。それが人であり、人の限界であり、だからこそ、人は自分だけでは立つことはできないのだ。

ヨブ記 3:17-19

死がすべての人にとつて同じであるのは、一面としてはそのとおりだ。理由は単純、人には死に對抗できる力がないから、誰一人として、それと格闘することすらできないからだ。何もできないことに気づくと、一切を手放してしまうしかない。そこには生きていこうとする苦闘もなく、空虚という意味合いでの静けさがある。それが良いものかどうかは別であり、また、神が与えようとしているのがそれかどうかは別として、絶望に陥つたときに、人がこのように死を迎えようとするとは、聖書に他の人々の中にも見出されるものである。サタンは、立派なら人なら耐えられるはずだと言っていたが、いいや、そんなものではない。だからこそ神は、全く違う道筋を与えようとなさる。

ヨブ記 3:17-19

昨日も書いたが、サタンの主張は根本から間違っている。彼は、ヨブが真の義人ならば耐えられる、と言いつ張る。つまりは、この苦難に耐えられないようならば、ヨブは義人ではない、その姿は偽りだ、と言っているわけだ。ヨブは、自分を義人だと自負していたわけではないようだ。彼は単に、神の前に誠実に歩みたいと思つていただけ、と言つべきだろう。だから、義人なら耐えられる、と挑まれても、彼にはそれに対抗すべき理由も何もない。そしてむしろ彼の言い分、人は誰でも耐えられ等はないのだ、という言い分は、まさに真実である。耐えられたら神に喜ばれ、うめくようなら神はがっかり、などというのは、決して神の意図ではない。喜ぶ者と共の喜び、泣く者と共に泣くのが神の意図であるなら、こういう勝負やお試しなど、ありえない。でも、私たち人間自身が、サタンと同じ主張をして、自分があるいは他の人を追い込んでいる。ヨブはサタンを意識してこの言葉を吐いているわけではない。彼は何も知らないという設定だ。でもそこには、愚かな挑戦を根底から打破する、大事な指針が示されていることを思わせられる。

ヨブ記 3:20-26

打ちのめされたとき、死を望むという話はしばしば語られる。ヨブは決して、自ら死を手にしようとしていたのではない。神が与えられたいのちであり、生であるから、その終わりを定めるのも神であることを、彼は重々承知している。ただ、生きることに疲れ、生きて耐えていくことに疲れ、無力さを思うがゆえに、死を待つ、という思いになっているのだ。これを間違いだと言ふ必要性はない。それはただヨブのうめきである。そして神は決して、うめくなど言っているわけではない。もともと、死は害悪というわけではない。悪しきものを求めているわけではない。牢獄に閉じ込められたときに、早くこの状態が終わつて解放されたい

と願うのは自然なこと。とは言え、脱獄を志すわけではない。ちゃんと解放されるのを求めるのみ。いや、善し悪しの話が語られているのではない。ただひたすらにこれは、ヨブのうめきである。その意味合いからも、友人たちの反論が出てくるのは、本当は実に愚かなことだ。そして神は彼らの言い分を認めておられない。

ヨブ記 4:1-6

友人たちがヨブに向かって語り始める。友人、確かに彼らは³11でヨブを訪ねてきて、彼と苦しみを共にしていた。その姿はとても大切なものだったが、あいにく人はこういう場合、事態を打開しようとする。それも、自分たちの力で、である。好転させることができなければ、その事態を解きほぐそうとする。理由を見出し、これだからこういう結果になると、納得をしようとする。他者のことも、自分自身のことでもある。実際の友人は、ここに出てくる人たちほど露骨ではないだろう。だが、こうやって描かれている姿は、まさに自分自身を鏡で見ているような思いがするはずだ。そして、そこには良きものは何も生み出され得ていない。

ヨブ記 4:7-9

エリファズは、ヨブのうめきに対して、我慢がならないと口を開いている。通常ならば、こんなことは言わないのだが、と弁解しているあたりは、まだしも遠慮がちである。痛み苦しんでいる人に追い打ちをかけることには、さすがに誰でもためらう。だが彼は、言うべきだと確信している。理由は、ヨブが間違っていると考えているから、そして、その間違いを正さないと、彼のためにならないと考えているから、である。そう、エリファズは悪意で語っているのではない。正しいことをしているつもりでも、その言葉はヨブにとって何の益にもならず、そして、この後の人々

と同様に、ヨブ記はそれらの主張を否定している。個々の言葉は、一般論としては正しいものもある。だが、それが意味をなしていない。ヨブ記には数多くの格言的な知恵が出てくるが、しかしこの書は痛切に、人の愚かさを語る。

ヨブ記 4:9-11

ヨブの何が間違っていると言うのか。エリファズは言う。物事の道理は明確であり、ずれることはない。つまり、正しい人には祝福が、間違っている者には苦しみが。この道筋は決して曲げられることはないのだと言う。ヨブは苦しんでいる。それはとてもかわいそうなこと。でも、苦しんでいるのだとすれば、そこには原因があるはずで、そしてそれはヨブの罪であるはずだ。となるほどと、すつきりとした論理である。だが、この世界の現実とは、そういうふうには割り切れるものではない。ヨブ記はその冒頭で、何ともわかりやすく、エリファズの言い分が間違っていることを物語っていた。ヨブの苦しみは神とサタンとのやり取りの結果である。実際にはそんなことは起こりえないけれど、でもヨブ記は会えてそのように設定し、それによってエリファズの主張が間違っていることを指し示している。すつきりとした論理だが、それは真実ではないと、この書は言う。

ヨブ記 4:9-11

エリファズは⁹9章のヨブのうめきを聞いて、この発言をしている。だが、¹⁰9章のうめきには、自分は正しいとか、理不尽な苦しみだとか、そういう言い分は出てこない。彼は単にうめいているだけである。それなのにエリファズは、ヨブが悔い改めていないと憤りを覚えている。悔い改めてい

ないかどうかも、この言葉では何も見えてこないのに。苦しみがあるのだから、悔い改めてはいはずだ、と決めつけているということになるか。エリファズを好意的に見ようとするなら、悔い改めればこの事態が解消される、と彼は考えて、だから、少しでも早く、ヨブを悔い改めさせねばと考えたということか。でもそれは、本当に悪いと思っていないくても、とりあえず謝つてしまえ、そうすることで相手の機嫌をとつて、苦しみが消されれば何よりではないか、という論理にしかならない。世の中には確かにそういう行動がある。でもそれは、神に対してのものとしては、むしろ神を馬鹿にしているものでしかない。

ヨブ記 4:12-16

エリファズが実際にそういう「霊」に出会ったのかどうか、とか、その「霊」とは何者かと論議するのは意味がない。それは「寒風が氷のように肌を突き刺す」と表現したときに、空気と氷は同じではありえないと息巻くようなものだ。彼は主張したいことを印象深く語るために、こういうふうに語っているのであり、そんなことはヨブたちももちろんわかっている。聖書はすべて神の言葉であるけれど、それは何もすべての言葉を神が強い意味を込めて語っているということではない。それとも、人間には言葉の遊びとか、時には誇張表現をしたりする自由があるけれども、神にはそのような自由はない、ということになるのか。だからここにある「霊」も、聖霊のことだとか、いやいや惑わしの霊だとか、そんなふう論議する必要はない。

ヨブ記 4:12-16

「節から語られていることは、内容的にも、エリファズ自身の考えである。だが、彼としてはそれを自分の勝手な思いではなく、当然の真理であると考えている。そのように主張したいからこそ、こういう語り

方にしたのでだろう。そしてむしろ彼としては、それが真実であると確信している様子だ。決して、自説を声高に語っているつもりではない。でもそこがやつかいである。人はしばしば、正しいことを言っているつもりで、実は違っているのだと気づいていないことがある。そういう人間の姿を、ヨブ記は指し示そうとしているということだ。そしてそれは、苦境にある人に対応する際には、非常に大きな課題になるのだということについても。この類のことは、論説として告げられるよりも、このように具体的な逸話として描いて見せてくれた方が、たしかに分かりやすい。

ヨブ記 4:17-21

エリファズが言っていることは、正しいことのように見える。とりわけ「節はまさにその通りである。人は決して、神の前に自分の立派さを誇るなどできはしない存在である。だからヨブについても、いや、どのような人についても、神の前に自分は立派なものだと主張することなど、できはしない。もしもヨブが自分のことをそのように主張しているのだとしたら、それはもちろん間違いだ。ただ、ヨブはそのようなことを言ってきたわけではない。彼はただ誠実に歩んでいただけで、自分を誇つてもいなかった。人は罪深い。その通りである。でも、だからひどい目に遭つても仕方がないと言うのだとしたら、うーむ、それならこの世界のは一人として幸せな者などいはいけないということになり、さらに言えば、神に向かつて助けを求めたり、祝福を祈り願つたりするのはお門違いだ、ということになる。聖書はそうは言っていない。確かに罪深い存在だ。でも、そんな者たちが神に祈り願うことができる、祝福を求めることができる、たとえ自分たちの生み出した害悪だとしても、それでもなお、神に助けを求め、この害悪を押しとどめてくださいと願うことができる。それが、神の前にいる人の姿である。

ヨブ記 4:17-21

17節は言葉としてはそのとおりである。だが18節からはどうか。17節から来る当然の論理的帰結としてエリファズは語っているけれど、神は本当に罪ある者たちを投げ捨て、全く認めず、叩き潰して当然と考えておられるのか。油まみれになったペーパータオルは捨てるしかないと考ええるように、こんな者たちは顧みられなくて当然と、そのように言うけれど、確かにそうだと人間自身は納得するけれど、でも神は本当に、そのように考えておられるのか。いや、だとしたらアダム以降の神との関わりは存在しなかった。キリストの到来はなかった、聖書は存在するはずもなかった。人は神など知る機会さえ持たずに終わっていただろう。現実が違う。神は全く別のことをなさった。だから、言わねばならない。エリファズの言っていることは至極正しいように思えるけれど、でもそれは、神の心、神の御業とは食い違いがある、と。

ヨブ記 5:1-7

ヨブ記の妙は、友人たちの語っている言葉、そこだけを見るとなるほどと思っても多々あるという点である。これを初めて読む者は、それらの言葉に頷きながら読み進めることだろう。そしてヨブ記自体も、彼らの発言について、その是非を今のところ何も語らない。最後の最後になつてようやく神からの言葉があり、そして友人たちは間違っていたと指摘される。その時読者は赤面するはずだ。自分自身もまた、同じような浅はかなことを語り続けていることを。そしてまた、神の御心の奥の深さに全く気づいていなかったことを。だが、この言い合いはまだまだ続いていく。それらの言葉を慎重に、距離を置くように試みていくことにする。

ヨブ記 5:1-7

ここに出てくる愚かさはつまり、物事には因果応報がある、ということに気づいていないという意味合いのようだ。悪いことをしたら悪い結果に至る、ということは、基本的にその通りであろうし、また、そうあるべきだとも言える。だが、この論理を逆から考えようとすると、話はいびつになつてしまう。つまり、悪いことが起こつたら、それは悪い前提があるからで、何か間違つたことをしたためにこうなっているのだ、という主張にしてしまう、ということだ。これは真実ではない。ヨブ記自体も冒頭から提示していた。ヨブの苦しみはヨブの罪の結果ではない、と。そのことを議論の余地もないほどに提示するため、あのサタンとの掛け合いまで用意している。ヨブ記だけで言えば、ヨブの苦しみの原因はサタンの邪推であり、神に対する対抗心である(それがこの世の害悪の原因だ)という意味ではない。この書が描いている話の中では、ということだ。ヨブ自身には一片の責任もない。だから、注意深く読んでいる者は、エリファズの言葉が立派そうでありつつ、しかし、真実ではないことに気づくだろう。

ヨブ記 5:8-16

神に向かつて尋ねる自身は何か。エリファズの言い分からすれば、ヨブは神に問うべきだったのだ、ということだろう。自分のどこが悪かったのですか、とである。災難が襲いかかった、当然に何か原因がある、自分に問題があつたはずだ、それがわからないというのなら指摘してくださいと求めるべきであつた、という論理である。とても正しい主張のように見える。今日でも悔い改めを説き、自らの罪深さを認めよと説かれることは多い。だが、ヨブ記はそれに対してちよつと待てと告げている。今のこの状態は本当に何かの罪深き行為の結果なのか、そう

やつて自らを否定することを神は望まれているのか、と。むしろ、人は思うべきではないか。良い状態の時に、成功している時にこそ、それでもやはり自分は罪深い者であつて、この幸いはただひたすらに神の恩恵であることを。そして感謝し、与えられた恵みを大切に受け止めていくこと、それが、真実なところ罪深き者に過ぎない人間のあるべき姿だろう。

ヨブ記 5:8-16

9-16節に語られていることは、まさにその通りである。エリファズの提示していることは正しい。だが、神がこのような方であるのなら、なおさらのこと、人はその神に期待し、神の祝福を大いに待ち望んでよいはずだ。ただ恐れおののいて、何が悪かつたのですかと萎縮するよりも、である。そして、苦境にあるならば自分の中に原因探しをするよりも、助けを求めて訴えればよい。少なくともヨブ記を通して神は、そのように告げている。神の偉大な力を思う時に恐怖に走る思いが強いのは分かる。だからこそ聖書は繰り返し、神は慈愛に満ちた方であることを語り続けている。

ヨブ記 5:17-27

ここににある主張も、大いに納得と思うようなことが書いてある。神の叱責を拒むのは最も愚かなことだ。神はそのことを通じて人に幸いをもたらそうとしておられるのだから。叱責は、きちんと受け取るべきである。私は悪くないと言ひ張るよりも、でもそれは決して、悪くないのに「ごめんなき」と言え、という話ではない。そしてまた、苦境があるときにそれが常に神からの叱責であるという意味でもない。そう、苦境が神からの刑罰であるかどうかは明白ではない。そこを取り違えてしまうと、この世界の状況を把握しそこね、つらい思いをしている人

を顧みることがなくなるだろう。エリファズはヨブと共に泣いていたはずである。あれはヨブと同じ思いで泣いていたのではなかったのか。ヨブが神から叱責されていることを悲しんでいた涙だったのか。ヨブの罪を残念なことだと嘆いていたのか。そういう悲しみもあるだろう。必要だろう。でもそれはこの世に存在する痛みのすべてではない。ヨブ記は明言している。ヨブの苦しみはヨブのせいではない、と。しかしそのことに人は気づこうとしない、と告げる。

ヨブ記 6:1-3

ヨブは自分の言葉(6章)が友であるエリファズに与えた衝撃の大きさにひるんでいるようだ。彼は自らの言い分そのものを否定することはしていないが、言い方が強すぎたかもしれないという思いを抱いている。神ご自身は、その言い方がどうかによつてひるんだりはなさらないので、思うままに語ればよいだろう。どのような訴え方でも受け止めて下さる。大事なことは中身の方である。ただ、人はもつと表面的なところで影響を受ける。その点では、人は皆、自分の言葉についてよくよく考えたほうがいい。たとえ真実でも、たとえ正しいことだったとしても、あるいは神は受け止めて下さつたとしても、人々はそうとは限らない。それは人という存在の限界であり、そのことをわきまえる必要がある。それにしても、この状況の中でこのようなことに思いを馳せるヨブという人、それは作者が作り出した一つの型であろうが、でも決して単なるイメージではない、人という存在の中に、作者はそういう資質を見て、あるいはそういう期待を抱いているのだと言える。神の造られた人間、罪に墮ちてしまつたけれど、それでも神のかたちとして造られていく存在の大きさを思う。

ヨブ記 6:4-7

自分の言葉について悔いを示しつつも、ヨブとしては今の苦境に対するうめきを、やはり挙げずにはいられない。それが人の実態だろう。それでいい、叫べばよい、神はそれを聞き、その上で、ふさわしく導いてくださるだろうから。事の背後にサタンの暗躍があるという観念を、ヨブは持つていない。だから、一連の出来事もまた、神の御手の中にあることだと考えている。だからこそ、叫ぶ相手は神であるのだ。サタンが首謀者なら、その意図の是非がどうであれ、つらすぎれば言うだろう。もうやめてくれ、と懇願するだろう。でも相手が神ならば、人はむしろ率直に、物事の善し悪しを自分で分析するよりも先に、ありのままに神に叫べばよい。「苦しいのです」と。人は論理を振りかざしすぎるのかもれない。ヨブは相当地理的な人だと思うが、でも彼はただひたすらに神に叫ぶ。ヨブ記はそれを肯定している。

ヨブ記 6:5-7

こういう文学的な文章について、事細かに探るのが適切かどうかは考えものではある。自然科学の教科書ではないので、全体としての雰囲気によって伝えることだてである。それはそれとしても、ちょっと確かめてみようか。5節は、ろばや牛は良い状態の中でうなつたりはしない、ということであり、苦境がなければヨブ自身だつて叫んだりほしくない、自分の言い方が激しくてもそれは受け止めて欲しい、ということだ。味の無いものは一転して、苦境については喜んで受け止められるわけがない、叫んでも当然ではないかということだ。まあ、卵の白身を好む人もいるので、この例示は万人に当てはまらないとは思いますが、言いたいことは分かる。ようするに、私の痛みを分かちて欲しいということになる。一緒に泣いてくれたはずの友に、このように訴える必要がある。というのは、実につらいことだ。

ヨブ記 6:8-13

死を願うのは悪だという観念がある。だが聖書にはそういう人たちは時折登場し、そして必ずしも否定されてはいない。神は別の道を示されるのだが、人がそういう思いを抱くこと自体が叱責されているわけではない。ただしくまでもそれは神の手に委ねるというものがある。人が自分で決めるのではない、決着をつけるのではない、いのは神のものであり、神が最善をなしてくださいとの待ち望むのみである。その違いを明確にしておく必要がある。そうしながらヨブの言葉を読んでいると、この世界には傷みと悲しみのうめきが鳴り響いていることを思い出させられる。私たちは、この世界は、この苦悩の中にたえずんでいる。

ヨブ記 6:11-13

人の抱える苦悩の理由は、耐え忍ばねばならない、という点に由来するようだ。我慢とは、自分の心に嘘をついて行動せねばならないことであるから、だから、もともとの苦悩にさらに増し加わり、倍増させ、さらにまた倍というふうになっていく。ヨブは8章でようやくうめき始めている。やつとそれができるようになった。でもエリファズはそれを止めようとする。義人であるヨブは嘆いてはいけないのだ、というようにして。これほどの苦痛はないとヨブは嘆いている。そういうものなのだと、作者は言うのだ。人に取つて最も不幸なのは、つらいのは何か、ということ。神は決して、我慢せよとは言わない。誰かのために苦労することについては、雄々しく担つて行けと言われるが、その人自身が痛み苦しんでいるのだとしたら、泣けばいい、叫べばいい、神は確かにその声を聞いてくださる、受け止めて下さる。立派さの意味合いを、人は、人類は、この世界は取り違えている。

ヨブ記 6:14-21

水無し川とは、カナンの地に見られる、季節によつては干上がつてしまふ川のことだろう。そこには川があつたはず。雨期になればまた流れるのかもしれない。でも、今、渴ききつて水を求めている者にとつては、今この瞬間に水がなかつたら、川の跡しかなかつたら、それは死をもたらすものにもなる。ここまで来るのに、ぎりぎりの歩みをしてきたのだ。ここまで来れば何とかなると思つてやつてきた。それなのに、水がない。身体的にも、心の思いとしても、それはまさに絶望である。友がその友情を投げ捨ててしまつたら、それと同じように絶望をもたらずと、ヨブは語っている。

ヨブ記 6:14-21

この箇所は、言い換えれば、打ち倒されていたヨブにとつて、友の存在、その支えというものは、ぎりぎりの頼りだつたということでもある。一連の話を見ていると、友人たちのほうではそこまでとは氣づいていなかったようにも見える。いや、つまり要するに、私たちは多くの場合、氣づいていないのだ。友が自分に、そこまでの支えを期待しているのだということまでである。それで表面的なことを言つてしまふ。「正しい」「ことを口にして、それで済ませたつもりでいる。崩れ落ちそうな相手に、「君はもつと強いはずだ」と言つてみたりする。それは事態を、なおいつその絶望に至らせるのだと言つている。

ヨブ記 6:21

あなたがたがおびえている、と語られているので、友人の方が、である。絶望に追いつれどとされているのは本人、つらい目に遭つている人のほうだが、その人の姿を見ていて、友人たちがおびえている。そう、自分たちが何もわかつていなかったこと、自分たちが思つているのとは全く違ふ

相手の真実、いやいや、真実にはまだ氣づいていない、その相手が崩れ落ちていく姿を見て、呆然としているということだ。なぜ、どうして、と痛みの重さをわかり得ていないとき、その浅はかな行動の結果について、人は驚愕し、慌てふためく。君たちはそれを見ることになる、これはヨブの悲鳴である。

ヨブ記 6:22-27

友に何を求め、何を期待するのか。自分の利得のために頑張れと要求するのだとしたら、お前は間違つていると指摘されたとしても、その言葉に耳を傾けて反省もする。だが、ヨブの願いはそんなことではない。自分の苦しみを知つて、友に嘆いて欲しいと、少なくともこの段階ではそこまでの話である。ヨブは、ここではまだ、自分は正しいのに苦しんでいる、とも言っていない。だが友たちは先回りするかのよう、ヨブの言いつきは間違つていると言う。それはあまりにもつらい、苦しい、苦境よりも友の言葉によつて打ち倒されてしまふ、と語られている。その言葉は、ヨブという一人の人間のことを描写しているのではない。私たち人類の姿を指摘している。

ヨブ記 6:28-30

エリファズは正しい主張をしているつもりでいる。だがヨブは言う。本当に正しいことを見極めて欲しい、と。彼自身も疲れ果て、倒れ果てているのだから、真実を見出す余力もない。だつたら友こそがそれを見出して、ヨブと共に受け止めてくれればよいのに。だが友たちはそのような思いではなく、自分の考える正しさを、ヨブのための正しさではなく、一般論としての正しさ(それが普遍的かどうかにも関係なく、単にそのように言われているという程度の)を唱えるのみ。何の意味もないと、ヨブは疲弊している。耳が痛い。そう思わねばならない。

ヨブ記 7:1-6

ヨブは裕福な人だったと、誰もが認識している。何の不自由もなく、おむらかに暮らしているのだと。だからこそサタンに狙われたのだという設定になつていて、読者もそこに関心を持つているはずだ。だがヨブは言う。自分の日々は苦勞の連続であると。苦難にぶつかった今の状態を言うようにも読めるが、おそらく彼はそれ以前から、もともと自分の日々を決して安楽だなどとは思つていなかったのだと、そういう主張に思える。つまり作者は、人々の歩みについて、周りからは安楽に見えていたとしても、それは常に苦闘であり、何かの平穩があるとんでもそれは、そういうた敵しい日々を経て与えられているものに過ぎないということを書いたのだ。自分のことでも、他の人のことでも、この視点を見失つて、彼は幸せでいいねえ、というふうに扱うならば、苦難に陥つた人とちやんと向き合い、励まし支えることはできないだろう。

ヨブ記 7:1-10

あなたと呼びかけられている相手は、エリファズではなく神ご自身のように思われる。日本語訳ではそういう認識になつているようだ。内容的にもそのように理解するのが妥当だ。エリファズとの言い合いの中で、しかしヨブの心は神にこそ向けられる。神ご自身以外には、真に自分の苦境を受け止められる方も、対処できる方もいないからこそである。それでもこの切り替えを見ると、友の言葉に傷つき、落胆し、彼らには頼れないということを意識している様子が見えてくる。むろん究極的には神に頼るのみである。だが、君たちではどうにもならないと思われてしまつ、思わせてしまつ、そんな態度で向き合つてしまつたことは、とても悲しい。

ヨブ記 7:7-10

こんな苦境に耐えられるようなものではないのだ、というヨブの訴えは、深いうめきとして読む者の心に突き刺さる。そうなのだ。私たちは強い者ではない。耐えられるような者ではない。ヨブならば耐えられるのかどうか、などと挑戦され得るような者ではない。あつという間に消し飛んでしまう者に過ぎない。だからこそ私たちは祈る。試みに遭わせないでくださいと。強がりはいらない。耐えてみせますなどと言う必要はない。自らの弱さを告白しつ、ひたすらに神に頼ろうとするしかない。サタンの攻撃はもともとからして人の本質には合致しない。義人と呼ばれているヨブだが、彼自身は決して自らを立派な者とは言つていない。それでいいのだ。

ヨブ記 7:11-16

ヨブは神に訴えている。神の監視は厳しすぎる、自分はそれに合格できるほど立派ではないと。事実を言えば、この書の設定においては、神はヨブを監視してはいないし、彼の過ちを見つけて出して罰することを意図しているわけではない。むしろ神はヨブを信頼し、安心して見ているという設定だ。それなのにヨブが神の関わりを監視として意識するのは、一つには、神の絶対的な權威を認めているからだろう。今、この身に起こっていることについても、神の支配の中、という以上に神がなさっているということだという認識が存在する。この点も厳密には違ふ。ヨブ記の設定は、ヨブの苦しみは神のせいではなく、サタンの悪かな行動によるものとなつている。だがヨブはそのいきさつを知らない。それで、絶対者である神の業として意識する。この葛藤は扱いが難しい。

ヨブ記 7:11-16

ヨブの苦しきは神のしていることではない。だが一方で、神の支配は絶対であり、すべての権威は神にこそある。そこで人は悩む。神の権威を意識すると、苦しみについて神を恨むことになりやすい。神のせいではないと考えると、あたかも、神の権威を小さく見ているような印象になつてしまう。事実としてはどちらの間違つているのだが、だがヨブ記はそういう論理に対する解答を提示しているわけではない。むしろ、悩み、戸惑う人間たちの現実に取り添いながら、その一切を受け止めて、導いて行かれる神の存在を指し示していることとする。だから、この葛藤についての答えは、ここには出てこない。友人たちの間違いは、神から提示されていない解答を、自分たちで勝手に見定めようとして、しかしそれがずれているために、なおさらヨブを苦しめることになつていく、というところにある。

ヨブ記 7:15-16

神から与えられた命を自らの手で断つことは、神の権威に対する反逆であるという理念がある。自死について厳しい態度を示すことは必要で、仕方がないという言い方はよろしくないのだが、でも一方で、このヨブのように、もういい、という思いが人の心を覆ふことはありえる。生きることに、そして死ぬことについて誠実に向き合い、そこに神の御手をちやんと見るつもりならば、限りある人の力と思いの中では、こういつたうめきが出てくることを、その善し悪しではなくて、その現実をありのままに受け止めていくことは必要である。さもないと、そのうめきに蓋をして、まるで何事もなかつたかのようなふりをして、しかし、その心のうちはずつとつめき続けて、朽ちていくと言つことになりかねない。人の心に様々な思いがよぎる。良いものも、悪いものもあるだろう。その一切を神の前に持ち出すことが、真の解決に至る道であることを、ヨブと、それから友人たちの言葉を見ている時に思わせられる。

ヨブ記 7:17-21

17節の言葉は、詩篇8では肯定的な意味合いで語られている。両者の関係を考えると、ヨブ記はあの言葉を意識して、あえて逆の意味で使っているのだと言えるだろう(とすればヨブ記は詩篇よりも後に書かれたもので、ヨブ記の情景はアブラハムあたりを想定させられるけれども、ずつと後代の者が、そういう時代に当てはめて書いているのだということにもつながる)。詩篇では、神はどうにもならない者たちに、しかし豊かに目を注ぎ、祝福を与えてくださっているという意味だ。しかしここでは、こんなに弱々しい者たちに、そんなにも関わつて、立派に生きよと要求されても、それは無茶な話、重すぎる期待、とうてい応じられないという嘆きとして語られている。神が顧みておられることは喜びのはずなのだが、でも神との関わりが厳しさと叱責としてしか意識されなくなると、むしろ逃げたいと思つてしまうことになる。そう言えばヨナは神から呼びかけられて逃げ出した。神との関わりにおいて最も悲しむべき状況である。

ヨブ記 7:20-21

ヨブは自分を罪ある者だと言う。もちろんすべての人は罪ある者だ。だが神はヨブを正しき人として認識し、そのあり方を肯定している。もちろん神は、ヨブにも様々な過ちがあること、罪があることをご存じだ。それでもなお、神はヨブを評価してくださっている。でもヨブはそのことを意識できずにいる。神はヨブを罰しているのではないのに、彼はそう思い始めている。このあたり、友人たちの言葉が影響を与えているように思える。友人たちの義に関する認識は間違つている。神の関わりについての認識も間違つている。だがヨブはその言葉に反発しながらも影響されている。人の言葉の恐ろしき、そしてだからこそ、神の御

心は何かをちゃんと見定め続けることの必要性を痛感する。

ヨブ記 8:1-22

ビルダデの主張は単純明快ではある。神のなさることは義であり、そして神は人へのあわれみを拒んだりはなさらない。だから主の前にへりくだり、赦しを求めて祈り願うべきである、と。言っていることは間違っていない。ただ、彼の思惑にはもう一つの前提がある。何かつらい目に遭っている人がいるなら、それはその人が悪を行ったからだ、という断定である。ヨブ記は告げる。それは違う、と。冒頭からヨブ記は、徹底的に話を作り込んで、ヨブの災難はヨブの責任ではないことを明示している。「心」章がなかつたら、疑心暗鬼になることはあるだろう。だがこの書は様々な論議の前提として明示するのだ。この事態はヨブの行動に悪があつたからではない、と。そして聖書全体もまた、善を行う者たちでも苦しむことはあると告げる。勝手な前提を据える時、その先の論理は妥当であつても、何の意味もなさないことになりえる。

ヨブ記 8:1-22

ビルダデはヨブの友人であり、彼のことを思いやつている。悪意などはないし、ヨブを不幸にするつもりもない。彼としてはヨブを助けたいという思いからこの言葉を発したのだろう。だが、その言葉は何の役にも立っていない。ヨブの助けにもならず、ヨブのために真実を提示することにもなっていない。その主張はただの妄言でしかない。論理的には筋道が通っていたというのに。理由は、事実関係を見間違っていたからだ。どれほど思いを傾けていたとしても、善意からだとしても、事実を取り違えているなら、相手のためにはならない。確かに神とサタンを取り扱いは人には知り得ないだろう。でも、目の前に見えている状況を単純化して悟ろうとするのは、より大きな課題を生むものとなりえ

る。

ヨブ記 9:1-11

当初、ヨブはうめいていただけだった。口を開いたときも、自分の惨状を嘆くだけで、そのことについて神の関与を口にすることはなかつた。だが友人たちの言葉によつて、彼の思いは影響を受けているようだ。よろしくない方向へである。この言葉の背後に、ヨブの諦め、神に対する諦めを感じる。そうですね、神は正しい、神のなさることは確実、人はそれに反論などできない、すべきでもない、だから私は神に対して、何も言えない、言えるはずもない、私はそんなちっぽけな存在に過ぎない、というように。これも事実としてはその通りである。だがそれは神が望まれている関わり方ではない。神が求められているのは、人が切に願ひ、切に訴えることである。その人が正しくても、間違っていたとしても。だが友人たちのように、正しい論理を出してきて抑え込もうとすると、その相手はヨブのようになりかねない。それは全く悲劇である。

ヨブ記 9:12-26

ヨブの苦悩は、12節の言葉に込められているように思う。彼は神の絶対的な力を認めている。神のなさることは真実であり、神が悪だとおつしやるならばそのとおりであることも承知している。だが同時に、彼は自分に対して嘘はつけない。だから彼は自分が誠実に歩んでいることを否定はできない。しようとしなない。完全でないことは百も承知だ。それでも「私が悪かつたのです。ごめんなさい」とは言えない。そう自覚していないからだ。一般論としては友人たちの言葉に同意しても、自分の境遇との食い違いを感じている。どうして良いのかわからなくなっているヨブである。ヨブ記自体は、大事な事実を語り続けてい

る。神はヨブを責めていないし、神はヨブの罪を指摘してもいない。ヨブは確かに苦しんでいる。だが神はヨブに対して、悔い改めよとは言っていない。重要なポイントである。

ヨブ記 9:25-35

ヨブの言葉は、独白であつたり、友人へのものだったり、そして神に対する訴えであつたりする。入り混じつた形で語られていることは、こういう作品の手法と言えるのだが、人の心の内としてもまさにそのとおりとも思う。論理性などは、真に必要な言葉を発する際には成り立たない。あるがままに人は語り、そしてうめくのである。

ヨブ記 9:27-35

ヨブは神の偉大さを認めている。そして自分が小さなもの、汚れた者に過ぎないことも。前からそうだった。「心」にあつたように、自覚していない罪についても、彼は神の前に自らの責任を認め、神のあわれみを請うつもりがある。神は絶対である。だがそれゆえに、ヨブは戸惑い、悩み、どうしていいのかわからなくなっている。神は偉大な方であるが、偉大さと向き合うだけでは、人は何もできなくなる。神は人に対してそのようには接してこられていない。むしろありのままに、体裁など度外視して、神に求め、神にすがり、神に訴えることのできるような親密に関わりを、神は与えてくださっている。神は偉大である。だがそれだけでなく、神との親しさを知ることこそ、神との深い結びつきを生んでいくものとなる。

ヨブ記 10:1-7

主の祈りによれば、試みに遭わせないでくださいと願い求めるようにと、そう告げられている。試みに打ち勝つ者であるべきだろうし、そう

ならせてくださいと願い求めるべきであろうが、でも主が教えてくださったのは、試みに遭わずに済むようというのが、人にとって必要なことであるのだというものだった。ヨブは誠実に生きてきていた。その姿勢は今でも変わっていない。だが、苦悩の中でヨブの心は乱れていることを、彼の言葉を読み続けていくと痛感させられる。こんな事態に遭遇していなかつたら、彼はもつと穏やかに主の前を歩んでいられただろう。この厳しさがヨブにとつて意義あるものとなりえたのかどうかについては、この書を最後まで読み通してから考えてみたい。でも今の段階では、事情がどうであろうとも、こんなことにならなければ良かったのにと、そう思わずにはいられない。人は弱いのである。

ヨブ記 10:4-7

神は人間とは違う。もちろんである。ヨブだつて分かっている。それなのにこんな言い方をせずにはいられずにいる。理由は、友人たちの言葉にある。彼らの言い分は、外面的には正論である。ほかの時ならヨブ自身も同意したかもしれない。でも今は、ヨブ自身の思いと、友人たちの正論とが重ならない。それで言う。もし神が人間と同じように自分をご覧になるのだつたら、もはやどうにもならない。と。論として正しいだけではどうにもならない。そして神はそのような方ではないはずだと、彼は訴える。泣き言でもあるが、そこにしかヨブとしては可能性を見いだせないのだ。

ヨブ記 10:8-12

ヨブが神に期待し、神に寄り頼む理由は、神が人というものの至らなさを「ご存じ」であるからだ。もともと神が造られた存在である。言い方は気をつけねばならないが、神は人間を完璧にはしなかつた。弱さがある。足りなさがある。独り立ちなどできない。完全ではない。だが

らと言つて、間違つたことに陥つて良いわけではないし、それを仕方がないと見過ごしてほしいと言つているわけではない。ただ、神はそれが人というものであることをご存じ。聖書の他の箇所でもそう語られている。だからこそ神は、人の祈りに応え、人が赦しを求める声に応えてくださる。11章でヨブは罪の関するささげものをしてた。それは言い換えれば、どうにもならないような者を、しかし神は受け止めてくださるという確信、信頼があるからこそである。単なる正義で、救いなど論外だと言つているような相手なら、願ひ求めたりはしない。ひたすらごまかすか、逃げ出すのみである。でも神は赦してくださる方。そういう方として自分にも関わつてくださるはずだ、くださっているはずだと、ヨブは訴える。友人たちの言い分とは全く違つたが、しかしこれがヨブの、そして聖書全体の立ち位置である。

ヨブ記 10:13-17

ヨブの訴えはよく分かる。また、それしかないとも思う。ただ、一つ、ヨブには混乱がある。神はまだ何も告げておられない。神は友人たちと一緒になつてヨブを責めてはいない。ヨブには罪があるとも、ヨブの罪は赦されないのだとも言つていない。そう、神は一言も語られていない。これはヨブ記の場面設定であるが、でも、重要なことだ。人はしばしば自分で勝手に神の心を決めつけ、そして自分勝手に神に不満を言い、あるいは嘆きを語り、あるいは諦めを語る。でも、神は本当にそう告げられたのかどうか。そこを確かめ直すべきだろう。さもないと、私たちは単に、自分が造り出して幻想と戦うことになつてしまふ。その違いを見いだすためには、ヨブのように切々と神に呼びかけ続けるしかないのであるが。

ヨブ記 10:18-22

生まれてこなければ良かった、という言い方は、世の中でも耳にする。ヨブはこの言い方を11章でも口にしている。つらすぎる境遇にあるとき、そういう思ひになつていくことは、人間にとつては避けられないことなのだとも思わせられる。ただ、この言い方は決して、だからすぐに死んでしまおう、ということではない点は、厳に確かめておくべきだと思う。ヨブも 11章で妻から、死んでこの苦しみを終わりにした方が、と言われたときに、それには同意していない。そう、生まれてこなければ、と言つてみたところで、その事実、その過去は存在するのだ。それを変えることはできない。タイムマシンで過去に戻り、自分を生前に殺してしまふ。それをちやんと理解しているというその前提でなら、こういう働き、そういう嘆きが出てくること事態は、黙つて聞いてあげるべきかもしれない。ヨブの言い分をすべて肯定する必要はないのだが、この言葉については、そうとしておいてあげても良いように思う。

ヨブ記 11:10

言葉数が多い、とツオフアルが指摘する。三番目の友人が口を開いたのだが、ヨブの言葉に圧倒されそうになつているという様子だ。当初はヨブ、決して多くを語つてはいないのだが、友人たちとの対話が始まつて、かなりよくしゃべるようになっていく。人とはそういうものだ、という認識があつての設定である。だからツオフアルの指摘は、そのとおりでもある。でもどうだろう。沈黙は金なりとも言うけれど、よく語ること自体は必ずしも否定すべきとは思わない。むしろ神が聞いておられる状況であることをわきまえた上で、正直に、率直に語り、その上で神に委ねていくことを意識するのであれば、その冗舌は必ずしも悪いとは言えない。ただ、この先のヨブの言葉はますます多くなつていって、それはこの話を造り上げた人の観念のだけれど（彼自身は決して

ヨブのような目に遭つてはいない、語りすぎることの不安というものも、意識しながら読んでいくべきかなどは思う。

ヨブ記 二二の九

友人たちの言葉は、それだけを切り取るなら正論だろうとは思ふ。それなのに彼らの言葉はヨブに届かない。そして最終的には神から否定される。間違つてはいないはずなのに、いや、必要な主張であるはずなのに。一つには、ヨブ記の元々の成り立ちからして、この設定は正義とか真理とか、そういうものからかけ離れたものになつてゐることがあると思う。神がサタンと取り引きをしてヨブを試すなど、決してあるはずのないことだ。神は何があつてもそのようなことはなさらない。ただ、人の目から見ると、そうでも設定しないと原因が分からないように思ふことがあるのは事実だ。ヨブ記の設定は荒唐無稽にも思へるが、それほどに、この世の現実には人の理解や思惑を超えていて、そしてしばしばそのことが、人々を苦しめてゐる。どうすれば良いか、の話は最後になつてから出てくるのだが、そこに至るまでヨブ記はずっと人々が悩み、戸惑い、逡巡し続ける姿を書き記してゐる。少なくともそれが、人の目に見える現実だからだ。友人たちの言葉がヨブに届かないのは当然である。語られてゐる言葉はしばしば人々の心に浮かんではゐるのだが、でも誰もそれに納得してゐないのだから。

ヨブ記 二二の二

友人たちの言葉がヨブに届かない理由の二つ目。それは彼らの説は「正しい」としても、それがヨブに寄り添うものではないからだろう。いや、彼ら自身はヨブのことを案じて、ヨブにとつての幸いを願つて語つてゐるつもりなのだろう。どうでも良い相手という扱ひなら、こんなふうにならざるに必死になつて語つたりはしない。ただ、この事態の眞の理由は、誰に

も分からない。結局神はそのことについて、ヨブに一度も説明をしていないという話である。とすれば、事態の解明を求めることよりも、少なくとも友人の役割は、彼と共に喜び、彼と共に泣くことではないか。いや、当初はそうだったようだ。でも人はしばしばそこから原因探しに走り、そして何とかして自分たちの力で解決を考へる。私もその傾向は強い。けれどもそれは意味をなさないので、この書は物語つてゐる。

ヨブ記 二二の六

もう一つ、友人たちの言葉がヨブに届かない理由として、それはこの書全体のテーマにもつながるのだが、彼らが人間の知恵と力による解決を目指してゐるからだろう。一般論としては、そういう努力は好ましいことであり、探求されるべきだとは思ふ。だが、それでは済まないこともあるのだということ、人はわかまえておく必要がある。それとも自分たちは万能であるとおごり高ぶるのか。考へてみると、友人たちの説は、ヨブの中に間違いがあつたということを指摘しようと探つてはゐるけれど、それならどうすれば良いのかということについての答えが見えてこない。罪を認めて謝罪すればこの事態は打開され得るのか。ヨブ記はその解決方法は認めてゐないようだ。ヨブはもともと常に罪のためのささげ物をしてゐた。彼は自分の気づいてゐないことについて罪があることを、神の赦しが必要であることを認めてゐた。でもこの事態である。友人たちは結局ヨブのために打開策を示してゐないのだ。その言葉が届かないのは当然とも言へる。

ヨブ記 二二の二〇

ツオファルの言つてゐることは、それ自体としては確かに正しい。だが、ヨブにとつては的を外してゐる。なぜか。まずは、神は一切のことをご

存じで、掌握されているという言い分。その通りである。けれど、だからヨブは自分で理解しているかどうかに関わらず、神の前に謝罪すべきだという話は、実はその言い分からずれている。神はすべてをご存じだということとは、友人たちが考えていること、ヨブが悪いことをしたから苦しめられているのだ、という理論、人間の目にはとてもまっとうな意見に見えているのだけれど、でも、それが実はとんでもない大間違いであるということも、友人たちは全く気づいていないのだが、でも神には分かっているということになる。神の全能を語り、神の主権を語るのであれば、あくまでも神の判断にこそ依拠し、どれほど正しく見えていたとしても確信していたとしても、人間の理念や感覚を絶対視すべきではないはずだ。むろん、考えはする、こうだろうと思ひもする。何も考えず、常に無であることなど、人にはできない。ただ、それでも常に自覚しておくべきなのだ。私の確信している正しさは、しかし、勘違いかもしれない、ということも。まあ、ヨブも自分の確信を握りしめてはいる。だが、友人たちは正しさを語り、けれどその言葉自体が彼らの行動を否定する。

ヨブ記 11:3-15

これもその通りである。だが、その通りであるなら、そこで出てくるべきヨブに対する進言は、赦しを求めて神の前にひれ伏すことではなくて、このわけの分からない事態そのものについて、ただひたすら神に助けを求め、あるいは、その理由を尋ねたいのであれば、そのように願うことだ。勝手に自分たちで、私が悪かつたです、と結論を出してしまうのではなく、である。思い浮かべたら分かるだろう。友人が朝から顔をしかめている。何か怒っているぞと考えて、それで、ごめんなさい、私が悪かつたと謝罪するとする。実は友人は、歯が痛くてイライラしていたのだとしたら、友人は尋ねるだろう、何だ、何かしたのか、と。その時、

よく分からないけれど、自覚していないけれど、たぶん、何かしたのだろうと考えて謝っている、と言ったら、間違いなく友人は本当に怒るだろう。その謝罪が真実なものではなく、単にご機嫌取りのものだから自分に対して真剣に向き合っているのではないから。そんな奴だとは思わなかった、と縁を切られてしまうかもしれない。自覚の有無とは別に人の罪深さを認めることは全く別の話だ。ヨブ自身も実は尋ね求めている。何が原因ですか、と。人はすぐに自分たちで結論を出そうとする。違う。神にこそ尋ねるべきであり、それがすぐに示されないのであれば、勝手に先走るべきではない。それは神の主権を認めていない姿だ。

ヨブ記 11:16-20

良い人は良い状態を、悪い人は悪い状態を。勧善懲悪とも言うが、それが理想的であるのは、私もそう思う。だが、現実には、それは理論であつて、必ずしもそうではない。いや、しばしばそうではない。そしてヨブ記は、実に何とも、こんな理由で苦しむのかと言いたくなるような設定をして、つまりは、本人の善悪とは全く関係なく苦難が存在するという枠組みの中で、この話を形成している。実際にはこんな無茶なことを神はなさらないけれど、大事なのはヨブの場合の理由ではなくて、わけの分からない事態は起こりえるという点だ。神は結局最後まで、なぜヨブが苦しんだのかを語らない。それは設定であつて、真の解決とは関係がないからだ。ともかく、友人の言い分は正しいのだが、でも、ずれている。

ヨブ記 12:1-6

このヨブの言葉、聞き方によつては、ずいぶんと傲慢、高慢。自分は神のことを分かっている、お前たちよりも分かっている、という言い方。嫌

な奴だと思われてしまふかも知れない。だが、ここまで話の筋を思い出してみよう。そうすると、友人たちはヨブのことを何もわかつていないのだと語られてきていた。ヨブは、これほどまでに神に叱られるようなことは思い当たらない。だからこそ、「ごめんなさい」と謝ることもできない。それはそうだ。現実を見極める方の前で、心にもない謝罪など、それこそ恐くてできない。それなのに友人たちはヨブを神の前にひざまずかせようとする。だからヨブは怒っている。そう、ちゃんとした対応をしてもうえないと、その人の心は非常に屑つく。ヨブの言い方を批判するよりも、これほどに言わせてしまっている友人たちの持ち込みでいる闇を必死で考えたい。

ヨブ記 12:7-25

一言で言うなら、自分たちは神の手の平の上にあつて、そこから抜け出すことなどできる者などというはずがない、ということだ。神の偉大さが次々と語られているが、この箇所ヨブはそのことの意味を受け止めていない。どうにもならないのだといううめきと絶望が、彼を虐げているようである。希望は必要である。どんな時も、大丈夫だと思えるような時でも、ヨブの心は枯渇しそうになっている。それは自分の悟りでは満たされ得ない。ただひたすら、神ご自身によつて満たされていくのでなければ。

ヨブ記 13:1-5

ヨブと友人たちと、どちらが真理を見いだし得るのかを競つてみても、何の答えにもならない。友人らは、自分たちは真実を語っているのだからヨブは聞くべきだと言つていた。ヨブとしては自分のほうが分かっていると言つている。両方とも、それぞれに真実も語っているが、実はこの出来事の真相は知り得ていないので、的外れの問答になつてしまつ

ている。悩ましいことだが、これが人の世にあるほとんどの混乱と対立の原因である。どちらかだけが極悪の場合もあるけれど、そうとは言えない。でも衝突し、解決が見えないことがあるのだ。ヨブ記はある種の設定の中で語るのだが、それによつてこの世界の厄介な混乱が映し出されている。

ヨブ記 13:1-5

ヨブも友人たちも答えを見いだせない状況に陥っているのだが、ヨブはかううじて、道が切り開かれ得る可能性を見ている。いや、本人は意識できていないという話のようだが、でも、最終的にはこれが答えになる。ヨブは友に言う。黙れ、と。彼らの言葉はむしろ、妨げになつていると。友人らとしては腹が立つだろうが、でも、彼らも、ヨブも、答えを見いだせないのだから、それなら、黙ることは必要であろう。そしてヨブは神に向き合いたいと言う。そう、ここまで、神はヨブに何も告げていない。この時点でのヨブは、まだまだ、神に前の沈黙しているわけではない。その激しさも伴う言い方の中に、実は答えがある。神が語つて下さる以外に、道は開かれ得ないのだ、と。

ヨブ記 13:6-12

ヨブは言いすぎだと思ふ。著者は、そういう印象になることを分かかつていて、ヨブの言葉を設定しているのだろう。友人たちは決してヨブに對して悪意を抱いているわけではないし、神に對しても逆らつたりもりはない。追いつまれているヨブは、人なら誰でもそうだろうが、口にすべきではない方へとすべり始めている。悪とまでは言わないが、こつという弱さを、人は誰でも持つている。ヨブは義人だが、でも、ヨブもまたただの人、でもあるということ、この書は意識して彼の言葉を形成している。偉大な人もあるし、高潔な人もある。だが、人が人である限り、そ

ういう至らなさがあつて、よく知つておきたい。

ヨブ記 13:6-12

言い過ぎではあつても、ヨブの指摘は重要である。神のためにと語るのかと。友人たちは不正を語ろうとしているわけではないし、ごまかしをしよつとしてゐるわけでもない。また彼ら自身は、神のために発言しているつもりでもないと思ふ。だが、実態として言えば、彼らは確かに、神を擁護するようにして語つてゐる。神は人にかばつてもらふ必要などはない。そういう必要があると思ふこと自体が、明らかに神に對する不遜ですらある。護教論という概念があるが、もしそれが本當に擁護するためのものなのだとしたら、それは適切な姿勢ではない。この教えをしつかり語ることによつて人々にその眞実が届くようにしたいといふ、伝道的な意味合いからならば良いのだが、防衛的である必要性はない。神は誰からも傷つけられたいはしない。人が神を守るのではなく、神が人を守つてくださる。この位置関係を間違えると深刻な事態にも至り得る。

ヨブ記 13:13-19

言葉の強さ、激しさに関しては横に置こう。ヨブは神に向かつて語ることを、その一点にこそ、寄り頼もつとしてゐる。たとえ神から罰せられてゐるのだとしても、である。神から叱られてゐる時、どうするか。神から逃れ、隠れることを目指すのか。それがごく一般的な感覚だろう。でも、神から逃れられる者などなく、そして、逃れたとしても何の益もあり得ない。助けはないのだ。だとしてたら、罪を自覚するなら、刑罰を受けてゐるなら、なおさらのこと、人にできること、なすべきことは神へと向かうことだろう。そして、ありのままに、自分の正直な思いを神に告げること。それ以外に道はないのだ。何が善か、何が悪かの議

論は答えを見いだせないこともある。だが、神に向かうのか、神から離れるのかは、どちらかでない。ヨブの言葉には、人にとつて唯一の道筋が込められてゐる。

ヨブ記 13:20-28

友人の言葉に憤慨し、そしてまた嘆き叫ぶようにして言葉を強くしてきてゐるヨブが、一転して神に向かつて泣き叫んでゐる。その起伏は著者によつて計算された演出だろうが、でも、それはまさに人の心の動きであり、神の前にあるべきありのままの人の姿であろう。ヨブはこの時点で（あるいは最後まで）この事態がヨブの罪の結果ではないといふことを知らない。彼の自覚は、そうではないはずだと訴へてゐるものの、その眞相は誰にも悟り得ない。それで友人たちのような理由付けになる。ヨブはそれに違和感を覚えて反発してきてゐるが、でも、その言葉に影響されてゐるようだ。いずれにしても彼は、神に訴へる以外には道を見いだせない。でもそれが最も意義深いことであると、ヨブ記は全体として語る。

ヨブ記 13:20-28

私はためだ、私は罪深い、と自分を断罪し、否定することは、必ずしも神の御心とは言えない。もちろん人は罪深い。だが神はそういう者たちを顧みておられるのだから、顧みていただけような者ではないと言ひ募るのは、神のしていることは間違つてゐると言つてゐるにも通ずる。それに、断罪して終つてしまつては、神の助けを期待することもやめてしまふことになる。人が罪深いのであればこそ、人二つでの唯一の希望は神の赦しと助けである。だから、自らの姿を認め、悔い改めつつも、決して切り捨ててはいけぬ。むしろ、どうにもならない者であることを認めつつも、なお、神に訴へ、神の助けと祝福を願ひ求める。

資格がないと思うならばなわさら、神のあわれみを求めていく。それ以外には道がないことをヨブ記は、こんなにもぎりぎりの場面を設定して、読み手に呼びかけてきている。

ヨブ記 14:1-6

神がヨブに対してこのような事態を与えた理由について、ヨブは全く理解ができていない。友人たちはヨブの罪のゆえだと言うが、彼自身は自分が決して完全ではないことを自覚しつつも、それでも神の厳しい扱いに直面するべき理由とは思えずに困惑している。この認識は正しいとも言える。それでも、神が何かの理由で事をなさっているのだとは悟り、それで彼は言う。どうかもう、関わらないで欲しい、と。もしもこれが自分の罪の結果だと自覚しているなら、第二サムエル 21:14 のように神ご自身にこそ関わつて欲しい、たとえそれが厳しきだつたとしても、と言えるのだろうか、この事態ゆえにこそヨブは、いつそのこと無視して欲しいと願っている。これは人として大いにありそうなことであり、しかし同時に、これは最も悲劇的であることを思う。

ヨブ記 14:4

人は汚れている。それはどうにもならない現実だと認める時、そんな者たちの中から良きものを拾い出すことなど不可能だとヨブは言う。これは確かに真実である。だが、人はしばしばこの現実を知らず、認めようともせず、人は立派になれるのだと思ひ込み、あるいは要求し、それが神の要求だと言つてしまつたりしている。ちゃんと頑張つて立派になれば神の祝福がある、というのが真実だとしたら、それは人には不可能だ。それだからこそ神は、どうにもならない人間たちの代わりに、御子を犠牲としてくださった。それしか道はない。友人たちは清くなれと言うが、ヨブは知っている。それはありえないのだと。

ヨブ記 14:7-12

ヨブがこいつた認識を以前から持つていたのかどうかはわからない。だが、苦境の中で人という存在の限界性を、嫌と言うほど思い知らされていただろうとは思ふ。人はいつも自分は偉いと思つている。他の生物よりも上だ。もちろん人間には様々な意義があり、能力があり、それらを否定する必要性はない。ただ、同時に人は、実にもろく、あつてなく失われていく。ここでは植物のような根強さを持ち合わせていないことが語られている。そう、人はあまりにもはかなく、もろい。失われてしまえば、それはすべての終わりでもある。ただし、人が人の力で存在する限りでは、ではある。だから、初穂としてのキリストの復活は重要だ。ヨブが言うとおりにはかなき人間が、しかし神によつては立たされ、生かされていく。ヨブ記は最後のところで、そのことを語り示している。

ヨブ記 14:13-17

ヨブは神に向かつて叫んでいる。友の言葉はもはや、彼には大きな意味を持たないということだろうか。友との対話だつたはずが、13:20 からはずっと神への呼びかけが続いている。彼は事の真実を知つていない。知らされていないのだから当然だ。その中で彼は今の状況から逃れ得る方法を見いだせないでいる。友は悔い改めて神に謝罪すればと言う。妻は神を呪つてしまえと言つていた。だがヨブがしているのは、神が顧みてくださるようになつて訴えである。友の言葉もあるので、自分葉正しいのだから理不尽に苦しみだ、といったような言い方はしていない。そんなことを言い切れるほど、ヨブは鉄面皮でもない。だとすれば、彼にできる事はただ一つ、神があわれみをもつて自分に温情を注いでくださるようになつて願うことのみである。謝罪でもない、正当な権利

だという要求でもない、ただひたすらに、神のあわれみと慈しみを願って。人になしえる最も意義のある行動と言えるのではないか。

ヨブ記 14:18-22

神のあわれみを求めつつも、今現在のヨブは、まだその温情を見いだせていない。体感していない。だから彼の率直な思いとしては、実感としては、もはや自分の前には何の希望も可能性もない、ということになる。ありのままに神に語っている、というような格好の良い話とは言えないのかもしれない。絶望的な思いの中でうめいている言葉でもあるだろう。彼はひたすらに苦しんでいる。だが、答えが見いだせないのであれば、ようするにこれしかない、これ以外にはない。人にできるのは、神の前に嘆くことのみ。神は分かってくださっている。受け止めて下さっている。そして顧みは確かに存在すると、ヨブ記は全体としてそのように指し示していく。

ヨブ記 15:1-6

ヨブの言葉が長くなり、友人たちの言葉が短くなっていく。現代の私たちは、それをヨブの思いが激しくなったことを表現するためと受け止めるのだが、執筆当時の文学技法がどうだったのかは、何とも知り得ない。近隣の古文書からの比較でどこまで分かるのかも、私にはよくわからないのだが、残っている書物が圧倒的に少ないので、さほど容易な研究ではないだろう。しかし、書かれている流れからすると、ヨブがたたくさん語っても、それは友人たちには届かなかったということは見えてくれる。議論、あるいは説得としてはヨブも友人たちも、どちらも成功しているとは思えない。だが、ヨブ記はもともとこのやり取りを眺めるためのものではない。人生の苦境にある者がどのようにつづめ、そしてそのような事態を人間社会はどのように見ようとするのかを、

この箱庭のような設定の中で語ろうとしているのだから、書としてはそれでいい。けれどもやはり、こういう説得は功を奏さないということには、心に突き刺さる。

ヨブ記 15:1-6

エリファズの言葉は、ヨブの言っていることの意味合いを理解していないと言わざるを得ないだろう。確かに、ヨブのような主張がエリファズの指摘するような課題から出てくる場合はある。だがヨブに関して言えば、そうではないだろう。彼は自分の正しさを主張しているのではなく、うめき、悩み、苦しんでいる中で、吐くようにして語っているに過ぎない。たとえヨブの言い分が不十分でも、間違いがあるとしても、彼の事情を考慮するならば、それに対する応答としては彼を責めるのではなく、寄り添うようにして彼の不安を緩和し、その上で一緒に良き方向へと歩んでいこうとするものでなければ、効果は何もない。でもおそらく大半の場合、人はエリファズのような対応をしているのだなど、そのこともヨブ記は指摘していると考える。

ヨブ記 15:1-6

エリファズの言い分は、それ自体としては正しい。だがヨブは自らの正しさを主張しているわけではない。また、周囲に対して自分こそが正しいのだと言っているわけでもない。もしも神が、ヨブの何をもつて悪となし、それゆえの刑罰なのだというふうに語られたなら、ヨブはそれを受け止めるだろう。でもそれはない。ヨブ記の設定からすれば、それはあるはずがない。もともとから、ヨブへの罰ではないのだから。それでヨブは戸惑い、悩み、そして自分のありのままの思いを語っているに過ぎない。ヨブは自分の正しさを認めると人々に要求しているのではなく、自分の戸惑いを知ってほしいと求めている。その訴えを受け止める

なら、友人たちになしえることは、ヨブと共に戸惑い、ヨブと共に祈り、ヨブと共に助けを求めていくことではないか。エリファズは論理としては正しいが、ヨブの友としてそこにいる意義を持ち得ていない。

ヨブ記 15:17-35

エリファズの論理は、善には祝福があり、悪には害悪があるというものだ。そのこと自体は有意義なあり方だし、そうあつてほしいと願うものでもある。だが現実には違ふ。善を行う者が虐げられることはあり、悪を行うものが栄えることもある。エリファズが、これこれこうであつてほしいと切望し、祈り願うのだとしたら、それは妥当だろう。だが、世の中はこういうものだとして規定しようとするなら、それは弊害の方が大きい。これをそのまま当てはめるなら、迫害の中で苦しむ信仰者はお前に問題があるからだとして断罪されることになってしまう。善悪の論理は重要だ。でも世の中はそれにはなっていないことも認めていくことが不可欠だ。そういう混乱の中に置かれているからこそ、人は神に祈り、神の介入を求めるのだ。エリファズのような論理だったら、神は不要か、せいぜいが監視役に過ぎなくなってしまう。

ヨブ記 16:1-5

ヨブは率直に語っている。そう、友人たちの言葉は彼にとって意味を持ち得ていない。道を指し示すこともなく、現状の中で立ち続けられる力を与えるものでもない。ただ、ヨブのようにはつきり言える人は滅多にいないことも覚えておく必要がある。ほとんどの人はただ沈黙する。何も語らず、何も指摘しようとはしない。じつと黙つて、そして、その愚かな忠告の言葉は当人を傷つけ続けるだけ。強い説得をしたような場合には、反論がないことの意味を真剣に、深刻に受け止める必要がある。

ヨブ記 16:6-18

ヨブの言葉は、神に対するうめきになつていく。この書の冒頭、悲惨な状態になつたときは、ヨブは黙して語らずだつた。だが今は、はつきりと神に対して言う。あなたが私をこんな目に遭わせておられるのだと、妻が言つていたような、神を呪つているわけではない。事実を述べているに過ぎない。この事態は神がなさつてのことだと、場合によつてはその言い方は不適切なこともある。人が悪をもたらし、それでつらいことになつている場合には、神がしていると言つのは適切ではない。でも、この書においては、ヨブの言い分は真実だ。神がなさつたことだと、この書はそういう話として語られている。その事情をヨブは知らない。でも、一切を掌握されている神がおられるのだからこそ、すべてのことは神の所轄だと考える。不思議なものだ。ここまで追い込まれて、ヨブとしてはありのままに心の内を語つていただけ。でもその内容は、実に適切、真実でもあつた。人はすべてを知り得るわけではない。だとして、神の前に率直に、また、その主権、その全能を信じる者としての訴えを、叫びをしたいものだ。大人しく黙つていなくてはなくて、面と向かつて、しかし、まっすぐに語るのだ。

ヨブ記 16:19-22

神に叫び、時には神のなさつていくことについて、なぜですかと問い、それは違つと叫んだりもする。でもヨブは分かつていく。それでもなお、頼るべき方、頼り得る方はただ一人なのだということ。そう、神こそが保証人。ヨブが全うに生きていくことについても、そして、もしもそれが存在するのなら、彼が犯した過ちのことについても。そしてこの方以外に真実を指し示してくれる相手はいない。だからヨブは神に叫び、神を求める。究極の時、これ以外に道はないことを、大いに考えさせら

れる。

ヨブ記 17:1-4

嘲る者たちというのは、ここまで話からすれば友人たちのことになる。それ以外に登場人物がないし、ヨブの苦しみは人為的なものではなく、もつと超越的な力によるものだ。本来彼らはヨブを慰めるために来たはずだった。だが彼らの熱意は空回りし、良かれと思つて行動したはずのこともだめになってしまつていた。いつのまにか、「嘲る者」と呼ばれても気にならないような事態に。残念なことである。自らが真実を知り得ていないことをはつきりと認め、まるで神の擁護をするかのようなことをしなかつたら、こんな事態には至らずに済んだかも知れない。苦しみそのものの打開は容易ではなくても、人にもなしえることはあるのだ。

ヨブ記 17:5-16

著者はヨブを全面的に正しい存在として提示するつもりはないようだ。それはさうだ。人は常に課題を抱えており完全な者などはない。というのは、この書を読み進めるとすぐに分かる真実、現実である。それを思うと、11:1の「誠実ですぐな心を持ち」という言い方も、伏線のようにも思えてくる。そんな完璧な人などはない。でも、さういうふうに見られていた人。ヨブ自身はそのことを自負もせず、自慢もしないけれど、でも、皆がさう見ている。しかし、それは真実ではないことを、さういう状況の中で人は悩み、うめき、苦しむのだということ、この書は物語る。むしろヨブのような苦悩は、精一杯誠実に歩んでいた人ほどに思うことかも知れない。初めから、どうせ自分などは、と思つていたら、ここまで悩みもしなかつただろう。誠実に生きていて、しかし苦悩する。理由は様々でも、それがこの世界の現実なのだ。

ヨブ記 17:5-10

友人たちに対するヨブの不信はますます強くなつていようだ。せつかくの友情が、ここまで崩れてしまつていのは残念だけれど、時として、悲劇的狀況は人の心を崩れ落ちさせてしまふ。誰かを責める必要はない。悪意があるわけではないのだ。それでも事態は混乱する。何ができるのだろうか。何を意図すべきなのだろうか。詩篇 131:1を思い起こす。人には届き得ないこと、悟り得ないことがあるのを認めて、だからこそ、是正よりも、苦悩する他者と共に神の助けを求め続けることか。そう言えばこの書には、ヨブも友人も、神に願つていっているという様子が出てこない。

ヨブ記 17:11-16

人は言う。彼は間違つていいるから罰せられるべきだと。これが、悪をなして繁栄している時であれば、それはさうだとも思える。だが今のヨブは苦しんでいる。立ち上がれずにいる。さういう者に対して、罰されるべきだと語ることは意味がない。それはただヨブを絶望に押しやるのみで、今以上にヨブの心を変える力もないし、今以上に絶望させてみても効能は何もない。この箇所を神への訴えとして見るなら、ヨブは言うのだ。もしも自分がそのまま失われるとしたら、神を思う心が一つ消し去られるだけ。何の意味があるのか、と。さういうことにもなりえるだろう。確かに、である。罰して滅ぼすのは、単に正義を遂行するだけである。それよりも救い出し、赦しを与え、そして立ち直らせたから、そのほうが意義がある。価値がある。さう、神のあわれみにすがり、こんなものは捨ててしまえ、というふうにならないことを、切に、切に願うのだ。

ヨブ記 17-13-15

絶望は何も生み出さない。罰にはなるとしても、それだけでは何も良いものを生み出さない。神の厳しさは正義の遂行を目的としたものではない。そこに変革をもたらし、救いをもたらし、いのちをもたらすためにこそである。人はそのことを忘れる。神の意図を忘れる。そしてただ目の前にある厳しさだけを取り上げて、それに同調し、声を張り上げる。それは意味をなさない、ヨブ記は語るのだが。

ヨブ記 18:1-3

一般論として言えば、ビルダデがこのように言いたくなるのは分かるようにも思う。ヨブの言い分は何度も繰り返されていることであり、先に進んでいない。そのため、当然ではあるが、解決への道筋が見えない。ビルダデはヨブをやっつけたいと思っているわけではなく、彼のために道を開いてあげたいと思っているのだ。だからこそ、堂々巡りの状態にいらだち、そしてヨブを叱責する。だが、ヨブにはこれしか言えないのだ。そういう状況に陥っているからこそ、ヨブの現状であるのだ。だとすれば、ヨブの言い分を否定してもどうにもならない。むしろ、ヨブの事態を認めつつ、それに寄り添うしか。何しろ、ヨブも、ビルダデたちも、誰も今はまだ、答えが見えていないのだから。そうやってうめき、悩む。人の現実であることをヨブ記は物語っている。

ヨブ記 18:1-21

良い者は幸いを受け、悪い者は害悪を受ける。それが正義であり、まっとうなあり方だと考えるのは、ごく王道である。そうあるべきだろうし、そうあつてほしいとも思うだろう。だからビルダデはいや彼だけでなく友人たちは考えるのだ。ヨブは苦しい状況にある。だとしたら、彼には何か、それに相当する問題があつたに違いない、と。論理としては

筋が通っているように見える。ただし、一つ、大きなずれがある。それは、**ㄱ**なら**ㄷ**が正しいとしても、**ㄷ**だから**ㄱ**とは限らないということだ。悪を犯したら罰せられるべきだが、苦しんでいる人が、その理由が本人の悪とは限らない。ヨブ記は冒頭から、ヨブには何の責任もないのだと言っている。それこそ現実からはかけ離れた仕方前提として示し続けている。そう、ヨブのせいではないと、この書は言い続けている。だから、ビルダデの言い分は、実にまっとうなものに見えるのだが、でも、間違っている。人の思惑はしばしばこうなのだ、この書は指摘しているようにある。

ヨブ記 18:20-21

困ったことだ。人の論理からすれば、ヨブは悪を行い、その結果として害悪に直面しているはずなのだ。そうとしか説明ができない事態なのだ。それなのに、**眞**実は違うとこの書は言う。しかも重要なのは、その本当の理由については、ヨブも、周りの人々も知ることができない。神はそれを明らかにしていない。理由がわからない。そして人の考えるような理屈にもなっていない。だとすれば、どうすればいいのか。友人たちの言動は、その答えを探し求めるよりも前に、ヨブを責め、ヨブを弾劾することで決着を見ることができると、そのように動いている。そして間違いに陥っている。人の考えることはその程度のもので、ヨブ記は辛辣に、人の限界を指し示しているとも言える。ではどうすれば良かったのか。ヨブ記は明言はしていないのだが、彼らの間違いは語っている、そこから見定めていくことを望んでいるのだと言いたい。

ヨブ記 19:1-6

困ったな、と、ヨブ記を読む者は思うはずだ。友人たちはヨブを憎んでいるわけではないし、彼をいじめたいわけでもない。ヨブを責めるのも、

そうすることでヨブの助けになると思っているからだ。このケースではその考えは間違っているのだが、一般論としてはありそうな話だ。でもその思いは届いていない。ヨブには伝わっていない。ヨブ自身の苦しみのゆえでもあるが、友人たちの伝え方にも問題があるのは明らかだろう。そうやって事はますます混乱していく。まさに、人の世の実態である。どうすればこの混乱から脱却できるのだろうか、必死に考えながら、人々はこの書を読み進むのだ。どこかに答えが示されていることを期待しながら。

ヨブ記 19:5-9

ヨブの言い方は不遜にも見える。神は「不当に」、ヨブを扱っているのだと言う。そんなことはあるはずが内というのが一般論としては真実であるのだが、だが、ヨブ記はその冒頭で、あの不思議な話を置いている。あんなことはありえないと思うけれども、でもヨブ記の話は、その出来事、そしてヨブの苦しみは、神がサタンと駆け引きした結果として設定されている。だとすれば、「不当に」という言葉が現実になつてくる。現実には、神が人を不当に扱うことはない。だが、人間たちの理解するようない、これが理由だろうというのが、あるいは、こんな理由であるはずがない、というものが、いやいや実は、そういうことがあることを、ヨブ記は暗示しているようにも思える。思い込まない方がいい。決めつけてしまうと、助けを見出すのを邪魔してしまうことがあるのだから。

ヨブ記 19:7-20

苦境に陥るときに、人には二通りの反応があるように思う。一つは、何か悪いものが攻撃を仕掛けて来ていて、でも神の助けがない、神はどこに行つてしまったのか、といううめきが生ずるものだ。神は善であ

る、ということを大前提にしているから、悪いことを神に由来するとは考えない。でもそれは一方で、神の手が届かない事態があるという話を形成してしまう。もう一つは、ヨブの言い方だ。一切は神のなさっていることだと言うことを大前提とし、だから、悪い事態もまた、神の主権のもとでなされているのだと考える。だからこそ、神に訴え、神に叫び、そして、香身が心を変えてくれれば、事態は改善され得るのだと期待する。一歩間違うと、神が悪を行つているのだという批判になりかねないが、でも、神の関与さえあればという期待、信頼、それゆえに寄り頼むことにはなる。どれかだけが絶対的に正しいとは言えないし、人の心も様々なところに位置するのだろうか。でも、だからこそ、ヨブ記のような想定を見ながら、自分の思うところ、神への祈り、その姿勢などをよくよく考えてみるのはふさわしい。そういう探索のための材料として記された書、とも言えるのだから。

ヨブ記 19:13-20

ヨブの言い分としては、何よりも厳しいのは、回りにいるはずの人々、親しい関わりを持つているはずの人たちから、理解されず、受け止められず、むしろ批判され、非難され、お前が悪いのだと言われ、あるいは、そばを向かれてしまふ、そのことが一番の苦しみであると言うことが語られている。財産の問題、肉体的苦痛なども、もちろんのこと、厳しい。だがヨブ記はずっと、それら以上に、妻、あるいは友人との関わりこそがヨブのうめきであることを語る。言い換えればそれは、真の慰めや励まし、支えというものが実に難しいということでもあるのだが、でも、これが要であるのなら、諦めるわけにはいかない。神は人を、他の人々と共に生きる者として造られたのだから、私たちはやはりそこに、可能性と希望を求めて、主に願ひ続けたいと思う。そう、隣人を愛することは最上の使命と、そのようにも告げられているのだから。

ヨブ記 19:21-29

ヨブは一切が神のゆえだと語る。でもそれは神に対する恨みや憎しみにはなっていない。神がこれまで支配されているのなら、だからこそ神こそが事態を解きほぐすことができる。最終的に、神が顧みて、この自分を受け止めて下さる。この苦しみは我慢できない、耐えられない、冗談ではない、自分の悪の結果だと思えるならどれだけ楽か、でもそうでもない、だから混乱し、傷ついている。でも、それでもなお、最後は神が人文を顧みてくださる。崩れ落ちた自分かもしれない、燃えさしのようになっている自分かもしれない、それでも、そんなものを、神は受け止めて下さる。それがすべてだと語るヨブの言葉は、やがて到来する神からの呼びかけに共鳴しているのだとも言えるだろう。

ヨブ記 19:28-29

友人たちは、ヨブを追い詰めたわけではないのだが、ヨブがこのように感じてしまっていることは責める必要はないと思う。そして、もしもそういうふうにして攻撃する人があるのだとしたら、どれほどその論理が一般的には妥当であり、まっとうな筋道であつたとしても、つまり、悪を行うからこそ苦難は訪れるのだというのが王道の理解であつても、でも、神の御手の中にある限りはその理解がすべてではなく、人の知り得るところは限られていることを、わきまえ知るべきだろうと、そのように思う。ヨブのように他の人を批判すべきかどうかはともかく、私たちは自分のあり方として、ヨブの指摘に深く自らの思いをさらし、洗い流すべきだろうと思う。

ヨブ記 20:1-3

苛立ちが、ツォファルを動かしている。彼自身は、正しい怒りだと考

えている。彼はヨブに対して悪意を抱いてはいないし、邪悪なことを意図しているわけでもない。善に基づいて語っているという確信がある。けれど、その言葉はヨブには届かないし、ヨブの抱えている痛みは何の答えにもなり得ていない。怒りが常に悪いわけではない。悪に対して、あるいは間違っている者に対して、怒りを覚え、憤りを覚えるのは自然な思いでもあるし、必要な場合もある。ただ、ヨブ記は語っているのだ。怒りは、そこに何も生み出し得ていないのだと。友人たちを悪人ではないと語りつつも、その言葉が無意味に響く様子を描きつつ、答えはそこには、怒りの中にはないことを、この書は語り続けている。

ヨブ記 20:4-29

率直に言えば、この世界がツォファルの言うとおりに推移するならば、どれほどありがたいことか、とも思う。悪い計略が潰え去り、悪を企む者、行う者たちが厳しく戒められて、全ての人にとつて最も自然なあり方が善であり続ける状態であるならばと思う。しかし、聖書が語るのには、単に善は勝つ、という論理ではない。この世界は、人は罪の中にある野だという現実を、聖書は語る。善のみが支配する状況はありがたいけれど、それはこの世には存在しないのだと、聖書は言い続けている。ツォファルが言うようなものは、この世にはないのだ。存在しえないものをどれほど主張しても、それはヨブにとつて、また人々にとつて、何の慰めにも、解決にもならない。聖書は理想を語るのではなく、神の前にある人の世の現実と、そのような世に対して神がどう関わるのかを語る。

ヨブ記 20:4-29

ツォファルの言うとおりであればいいのに、と昨日書いたけれど、いや、そうでもない。もし、この通りであるとしたら、人にはもはや、存在し

得る場所がない。全ての人は罪人であり、そして神の前に立てる場所を持ち得ない者だ。それはつまり、神が悪を排除されるとしたら、その瞬間、人は全て消え去るということである。ツォファルはこの世の論理として、あるいはあるべき姿としてと意味合いを減じたとしても、そういう風に語る。だが、人はこれを希求はできない。これが「110」でも実現した時、人はすべて終わりなのだ。だから、人はむしろ願わずにはいられない。罪ある者が、悪を企む者が、それでもなお、神の憐みによつて保たれ得ますように、と。その意味でも、究極の善を語ることは、何の解決にもなりえない。

ヨブ記 20:4-29

そして、ツォファルの言葉が意味をなしえないのは、ヨブの自体は、ヨブの悪に対する神の刑罰ではないからだ。そうではない、ということもヨブ記は明確に示している。むろん、それは人には知らされてない。でも読者はすでに種明かしされている。だから、必死になつてヨブの中に原因を探し求めようとする友人たちの行動に、読者はあきれざるを得ない。君たちは全くもつて勘違いしている、と。悪の結果として悲惨さを身にまとう者もあるのは事実だ。でも、全ての悲惨さがその人の悪の結果であるとは限らない。限らないのだと、ヨブ記は語る。だから、悲惨さを見てあなたの悪が原因だと語る者たちに対してこの書は、愚か者よ、それはこの友人たちと同じだ、と語る。悪は戒められるべきであり、悔い改めを呼びかけられるべきではある。だがそれは、悪そのものを知るならばである。悲惨さを見てそのように言うのは間違っている。ヨブ記はこの世界が抱えている混乱と悲劇を鋭く告発している。

ヨブ記 21:1-6

聞いてもらえない、といううめきを、ヨブは何度も告げている。聞く耳

を持たない相手は、うめき、叫びたい人にとつては恐怖でしかない。襲いかかっている悲惨さと同様の攻撃にしかならない。そうなのだ。この書が語ることを読みながら、自戒させられる。自分は、この世界は、どれほど多くの場合に、正しさという理由によつて、相手の言葉を塞いでしまっているのか。神は違う。聖書には、人々が愚かにも神の前で間違つたことを主張していたとしても、その口を閉じさせるために叩き潰しました、というようなことは出てこないはずだ。最終的には、人は自らの語る言葉の責任を担わずにはいられない。でも、問答無用と否定する神ではない。

ヨブ記 21:7-16

友人たちの言い分は、ヨブは苦しみを受けているのだから何かの悪があるはずだ、というものだ。それに対してヨブは語る。世の中を見よ、悪人が栄えている光景はいくらでもあるではないかと。彼らは安泰で、神など無用だとまで言うくらいだ。善なら栄え、悪なら苦しむ、という方程式が成り立っていないことは、誰もが知っていることのはず。それなのに人々は、苦しんでいる人を見ると、何かの悪が理由だろうと決めつける。おかしいことだ。一つの論理が成り立っていたとしても、でもそれは常に有効な法則ではない。悪に対して憂え、悪に対して怒りを覚えるのだとしたら、なわさらのこと、本人の責任ではないのに苦しむ人たちがいることを認め、その人々のために支えをこそ祈り願うべきなのに。

ヨブ記 21:7-16

そう、どうしてなのだろう。人は苦しんでいる人を慰めるよりも、その人を勝手に糾弾する。あるいは自らを糾弾する。人の罪がこの世界を破壊していることを認めたくないからだろうか。この世界に希望を

抱くこと自体は良い。そうありたい。でも同時に、この世界には限界があることをきちんと認めていなければ、そうでなければ、物事の現実を見ようとしてもしないままに、かえって誰かを傷つけ、あるいは自らのおとしめることになる。罪とその結果は現にある。だとしたら、どれほど目を背けたくても、それを直視しなければならぬ。そうでないと、かえって様々な所に害をもたらすことになってしまう。

ヨブ記 21:14-15

こつこつという分がまかり通つてしまつている現実がある。こんなことを言い放つならば、直ちに天から火、なのだとしたら話は簡単である。が、そうではない。神はそうはしていない。だから人々は、神など信じても意味がないと言いつつしまつている。それは徹底的に間違いだ。でも、同時に認めておくべきは、この世はしばしばそういうふうになつて、言えるような状況があるのであつて、神はそれを許容している。だから、善イコール幸い、悪イコール苦しみ、ではないことを、わきまえ知つておく必要がある神はそういう世界と向き合つている。人もそういう世界にいることを認めるべき。そのことをヨブ記は、こんなにもたくさんの言葉を用いつつ、必死になつて呼びかけている。

ヨブ記 21:17-26

悪がのさばり、はびこつていると言つた直後にヨブは、それでもなお、悪が放置されてはいないのだということ語る。善でも苦しむことがあるのと、悪そのものはやはり罰せられるべき、ということとは、しっかりと区別する必要がある。そして私たちが神に祈り願うべきは、そうあらせてくださいという求めだ。ただし、現象を見て人間が勝手にさばいてはいけない。人のなすべきは互いのために祈ることであり、断罪し、あるいは、勝手に決めつけることではない。人は神ではないのだ。義を

求めることは大切だが、義を語り、あるいは義を判別するのは、留意すべき事である。そしてヨブ記は厳に語るのだ。彼は悪くない、神がヨブに刑罰を下していない、この苦しみはヨブのせいではない、と。この点がありえることを、決して見過ごしてはいけないと、この書は呼びかけ続けている。

ヨブ記 21:27-34

この世の現実と、あるべき姿について語つた後に、ヨブは言う。そのように考えてみようとするなら、あなたがたの言つていること、主張していることがどれほどの外れであるかに気がつかないのだろうか。友人たちが「慰め」よつとしてゐることは認めよう。でも、その言葉は何の意味も持たず、何の助けにもならず、ただひたすら私を苦しめるばかりで、愚かさの極みでしかないのだ、と。ヨブの苛立ちを感じるが、同時に彼が正しい人と呼ばれていたことを思うと、こんなふうになつてゐるを得ない事態、友人との関係について、ヨブはひどく傷つき、そしてうめいているのだと理解できる。真に人を生かし得る言葉は結局、神が指し示してくださる真実に基づいてゐるしかない。

ヨブ記 22:1

エリファズの意図は、ヨブを思つてのことだろうとは考えたい。もし、ヨブの存在を嫌悪しているのなら、放り出してしまえば良いのだ。そうはしてほしくないのだから、彼は思つてはいるのだ。でも、その言葉は空しく響いている。意味をなしていない。論理としては間違つたことを言つているわけではない。だが、それがヨブにとつて何の意義もなしていない。この書は友人たちに語らせることによつて、人の言葉というものの重要性と、そしてその危うさを指し示している。

ヨブ記 22:2

この理論は、聖書でもそれほど多く出てくるわけではないように思う。ただ、それは大事な視点ではある。人は神のために何か貢献し、神に対して恩義を与えているわけではない。人がまともに歩むのは、自分自身のためと言わなければならない。人の貢献がないと神が困るわけではない。ただ、そうではあるけれども、神は人の歩みを見て喜び、称賛の言葉も投げかけられる。それはつまり、神がどれほど人を思い、人を慈しみ、人の幸いを喜んでおられるか、ということである。そこを取り違えて、自分たちが何か神のために貢献しているかのような思いを抱くとまずい。だから、エリファズのこの指摘は、その通りではある。もつとも、ヨブがそこを取り違えているようには思えないのだが。

ヨブ記 22:4-11

なぜ、エリファズはこのように糾弾するのか。ヨブの中にそのような姿を見ていたのだろうか。だとしたら最初からそのように責め、いや、こういう事態に至る前に、友であるヨブに対して厳しく語るべきだっただろう。でも、ここまでのところ、ヨブにはこのような姿は見当たらない。そういうものはなかった、という前提の話の構成になっている。だとすれば、エリファズの糾弾はつまり、ヨブが苦しんでいるので、それならこういう悪を行っていたのだろうか、という憶測だ。そういうふうな言葉が投げかけられているのだ、という状況を、この書は提示している。そしてそれは、世の中でもしばしば見られることなのだ。でもヨブ記はずつと言いつづけている。こういう決めつけは間違っている、と。そう、ヨブは彼の悪のために苦しんでいるのではないのだから。

ヨブ記 22:12-20

ヨブ記は、まのこの論理が語られても、それが意味をなしていない

場合があることを指摘しているようだ。真実が複数あるということではないし、相手を思いやつてどうこう、ということでもない。この書が語りたいのは、人の思うところは神の真実、現実からずれていることが多々ある、ということである。私たちは論理を組み立てて神の御心を探ることについて、常に自らの限界を心しておく必要がある。そうだと論理の意味がある、価値もある、だがそれが常に御心そのものであるとは限らない、ということだ。だからこそ、繰り返し常に、聖書という神の言葉そのものに立ち返って、本当のところ、主はどのように語り、示しておられるのだろうかと尋ね求め続けるしかない。

ヨブ記 22:12-20

人がしばしば、エリファズの言うような愚かさには陥ることは事実だ。神などたいしたことはない、どうせ遠くで眺めているだけ、というふうに言い出すのは、人の常でもある。ただ、ヨブ自身がそのようなことを言った場面は、ここまでのところ存在しないはずだ。エリファズはヨブの心の内を見透かしたと言ったことか。ヨブ記の設定からすれば、そういう不思議な展開が組み込まれることもありえるだろう。が、この書はずつと、ヨブが神をないがしろにしていることを語り続けている。他の書であれば、それがごまかし、偽りであるという場合もあるのだが、この書はもともとからして作り出された物語なのだから、筆者の思惑すら裏切る形での人々の言動、ということはありえない。ヨブはこんな言い方はしていない。その心にもそんな思いはない。それなのにエリファズはこうやつて責めている。そう、人はこんなふうにして、自分の勝手な思惑で人を責め、さばき、否定することがあるのだと、エリファズという登場人物を用いてこの書は、鋭く問い掛けている。

ヨブ記 22:21-30

エリファズの言葉は、読者にますます困惑をもたらす。彼の言っていることはその通り、と言えるだろう。神と和らぐべきこと、それだけが唯一の希望の道であること、そうしてこそ人は正しく、意義深く生きることもできるのだということ、その通りである。ただ、二つの点で、エリファズの言葉は意味をなしていない。一つは、ヨブは神に背いてはいないこと。全体論としても、人間の罪の話を、この書は取り沙汰していない。少なくとも友人たちの論議ではない。彼らは「私と一緒に神に立ち返ろう」とは言っていない。ヨブの個別具体的な悪を糾弾しているつもりなのだ。でもそれは、ヨブには該当しない。もう一つは、神に立ち返ればこの苦しみが消え去るというのは、少なくともこの書の設定においては真実ではないことだ。この忠告は一般的には妥当だ。でも、この忠告に従えばヨブは救われる、ことにはならない。人は読み進めるほどに困惑する。

ヨブ記 23:1-7

ヨブの言葉は真摯な願いに通じ得るものだ。ただし、8節以降からすると、この言葉は本音と言うよりも、そうあつたら良いのにというただの願望、実現性が見いだせない言葉のようではある。でも、できることなら、このように神に訴えたい。本気で、切に。人によつては、こんな言い方は神に対して不敬であると考えられるかもしれない。黙つて聞き従えば良いのだと言うかもしれない。でもそれでは済まない。私たちが直面するこの世界は、それでは済まない。何事もなく平穏なら、静かに神の呼びかけを聞いていれば良いかもしれないが、私たちに必要なのはむしろ、神に訴え、神に求め、神の言葉を、その答えを願うこと。だから、このヨブの言葉は、少なくともこの言葉は、人にとつて大事なものである。

ヨブ記 23:8-17

ヨブの言葉を、どのように受け取るべきなのだろうか。人は迷い、戸惑い、うろたうとさまよい歩くのだということが、このヨブ記の語られていることの背景にはあるようなので、一つ一つの言葉について、その意味合いを明示する必要はないかもしれない。その点では、ヨブ記のある一箇所の言葉に基づいて何らかの神学を構築するのは避けた方が良さそう。ここにあるヨブの言葉のうろつきは、まさに彼の心を示しているように思える。彼は神からの答えがないことに戸惑い、うめき、苦悩している。でも同時に彼は、神の御心は確かであることについては、何一つ、揺れ動いてはいない。友人たちの言葉は、ヨブの是非ばかりが語られるのだが、ヨブの苦悩は結局、神は確かだと信じているから、そのものとも言える。ヨブの妻が言ったことを思い出す。神を呪つて死んだ方が、と。でも、ヨブにはそれができない。彼は神を確かな方だと確信しているから、神など、なんて、ことはそれこそ死んでも言えない。

ヨブ記 23:8-17

ヨブの苦悩は、神は全てを「ご存じなのに、人は神の御心を知り得ない」ということによるのだと語られている。事実としては、その通りであるし、また、人の認識できる領域が神のそれよりもはるかに小さいのは当たり前でもある。もしも人が神の一切を掌握できる機会を得たとしたら、人はその時点ですでに、情報量の膨大さに崩壊してしまふだろう。そんなことはヨブも分かっているはずだ。でも、神を思うからこそ、この格差に彼は果然としている。一切を委ねて、知り得なくてもかまわないと言いつけるならば良いのだが、人は衝撃に直面するとそれができない。だからこそ、神を知りたいと切に訴える。そして、今のところ、ここまでのところ、神はまだ何も語ってはおられないのだから、ヨブのうめきも当然だろう。

ヨブ記 24:1-17

理不尽なと思えるような悲惨さが生じている、とヨブは語る。ここに挙げられているのは一般的な出来事であり、彼個人の経験ではない。だがその背景には、彼自身の今の苦難についても、その理由が分からない、理不尽に過ぎるという思いが込められていると言つて良いだろう。どうしてこのようなことが、と語り、そして、神は一切をご存じのはずなのに、何も対応して下さっていないとうめき、神への期待があるからこそ、なおさらのこと、ヨブの心はうめき、その痛みが重くのしかかつている。ヨブの言い分を理解が不十分と言ふことはできる。でも、神の前に生きることを考えるなら、そして、神を信頼することを考えるなら、こういううめきと叫びはむしろふさわしい。神がそれにどう応えてくださるか様々だとしても、でもこれは、神への信頼があるからこそその叫びなのだと思つた方が良い。

ヨブ記 24:13-17

ヨブが語っているのは、悪意を持つ人による苦境である。ヨブ自身の境遇は病気や天災など、悪人の存在は意識されない部類のもので、ここに出てくるものとは様子が違う。でも、そういった悪人が好き勝手に歩き回っていることも、神よなげ、といううめきにつながるという点で、ここでは同類として扱われている。人の悪意なのか、悪意自体は存在しないのかは、苦しむ人にとっては大きな違いはない、という認識を、ヨブ記は提示している。確かにそうかもしれない。それは言い換えれば、悪人によつて苦しめられている人に対する慰めや励ましの仕方も、自然災害などでの苦境に対するものと同じものが、実は有効というところか。大事なものは、その苦境の原因探しではなくて、そこで痛んでいる人をどうやって支えていくかということにあるのだと、考えさせら

れる。

ヨブ記 24:18-20

悪をなす者は、それにふさわしい扱いを受けるのだ、ということは、聖書で繰り返し告げられている。それが正義だと誰もが思うのだし、最終的な結末はそうなるはずである。ただ、ここまで語られてきているように、そういう悪人が野放しとなつて人々が傷ついているというのまた、現実である。ここにある言葉は、一般的にはたいせつな真理として見ることができるけれど、ヨブの一連のうめきの中で見ていくと、それは真理とか、さばきとか、正義とかの話ではなくて、むしろ、ヨブの叫び、どうかぜび、という言葉のように思える。悪を罰してください、と人が言う場合、それが単なる『正義』論であるとすれば、何とも醜いばかりのものであり、自分に跳ね返ってくるもの(さばきについてのキリストの指摘)であるが、ここにあるような叫びは、切に受け止めてほしいものであるし、また、そこにこそ慰めと励ましが必要なのだと痛感する。

ヨブ記 24:21-25

神が彼に安全を与えられる、というのは、神がその悪人の所業を肯定しているという意味ではない。神がこの世の一切を掌握しておられることを考えるなら、彼がそこに立っているのはやはり、神の許容があるのだと考えざるを得ない、という、神の主権についての認識に基づくものだ。神が悪をそのままに置いておられる理由については、人は完全には理解し切れていないと思う。ただ、悪がそこにあることについても、神の主権のものでこのことだと認めることは、とても重要な意味を持つ。つまりそれは、ヨブが語るように、神がそうしようと思われるならば即座に、その悪は取り払われるということだ。神がその悪を操作

し切れていないのだとしたら、神が意図されてもその悪が排除できるかどうかはわからないということにもなる。そうではないというこの認識は、実は最も重要な慰めであり、励まし、希望でもある。ヨブの神に対する信仰、信頼は非常に深い。友人たちの浅い言葉が太刀打ちではないのは当然である。

ヨブ記 25:1-6

友人たちの言葉はここまでである。最後の声はとても短く、そして、ヨブを説得しようという気概も感じられない程度のものである。その言いは正しい。道理に沿っている。ただし、そのことはヨブだつてわかっている。わかっているけれど、でもだからこそ、今の自分の境遇について、ヨブは何の答えも見いだせていない。だから悩み、だからうめき、困惑している。友人たちの言葉は、それ自体としてはしばしば正しい。全うでもある。だがそれはヨブの訴えている苦悩に向き合うものにはなりえなかった。でもこれが、人の考える事柄なのだろう。そしてだからこそ、うめきはさらに深くなる。

ヨブ記 26:1-4

ここからヨブの怒濤の言葉が続く。そして、ヨブの言葉としては、ほぼこれで終わりになる。最後のところは神に対する短い応答が出てくるだけだ。後でエリフの言葉が出てくるけれど、ヨブとしては、ここまでの友人たちとの対話によつて何も見いだし得なかつたことを踏まえつつ、思いの丈を吐き出しているのだ。この書は綿密に構成されたものであるから、ヨブという人物の感情的な言葉のように見るのはふさわしくない。ただ、人のありようとしては、まさにこのように叫ぶであらうと、そのように語るつもりでも、一連の叫びである。

ヨブ記 26:5-14

様々なことが述べられているが、善悪的なこともあれば、単なる自然現象的なものもあり、語られているのはようするに、神は一切を掌握されているのだ、という一点なのだと思う。神は自然界も支配しておられるし、そしてまた、悪に対しても同様に支配を及ぼしておられる。人は、そのような神に対抗などできるはずもなく、ただひたすらに圧倒されているのだ。ただし、ここまでのヨブの言葉を見ているとわかるように、これは決して諦めの言葉ではない。そこまでの神だからこそヨブは訴え、叫ぶことができる。神の答えがあるかどうかはわからない、救出があるかどうかもわからない、でも、神は何もできずに無力に押し黙っているのではなくて、容易に事態を動かすことができる方、その上での今の事態なのだ、彼はそう言っている。多くの場合、人々はそのようには考えず、事態について神は無力だと嘆いてしまう。でもそれではすべての希望は失せてしまう。

ヨブ記 27:1-7

混乱に陥ると、一切を投げ出してしまふ人は少なくない。馬鹿なことをして、自暴自棄になるというようにである。けれど、ヨブはそのように突っ走ることはしていない。彼は誠実さを手放そうとはしない。友人たちの厳しい言葉に、もういいよと言って負けたりはしない。その指摘、その糾弾は自分の状態とは異なっていると確信していて、それを放り出すことはしないのだと言いつつ続ける。これは容易なことではない。言われ続けると疲れ果てて、敗北を認めるのはよくあることだ。ヨブは正しい人だと言われている。彼の言動がすべて正しいと言ふことではない。ただ、ヨブは偽りに身を任せることはしない人だったようだ。真実と確信することにしがみついている。それは簡単なことではない。こここそ、正しい人と呼ばれる姿なのだと思う。そして、こここそ、後か

ら来る神の呼びかけが生きてくる。もし、ヨブがこのあたりで敗北してしまつたら、それは神の前に真実ではないわけで、彼は顔を上げられないことになつてしまふ。強情なのではない。必要な頑固さである。

ヨブ記 27:8-12

ヨブにとつて、頼り得るものはただ神ご自身の真実である。財も地位も何もかも彼はなくした。彼の言葉に、もはや世の中は関心すら持たない。そして友人たちは、自分たちの理解できるところにしがみついて、ヨブの必死の訴えに耳を貸さない。ヨブは、自分が何も持つていないことを痛感させられただろう。だからこそ、彼はただ一つ、神にこそ寄り頼む。神ご自身がヨブを断罪されるのなら、そして何が間違つていたのかを指摘されるのならば、もちろんヨブはそれを受け入れる。でも、ここまで神は一言も、ヨブは悪かつたのだとは言つていない。もともとそんな言葉が神から出てくる可能性は皆無だと、この書はそういう設定の話だ。現実にはこんなことはありえない。この害悪は私のせいではないと言ひ切れる人などはいない。でもこれはそういう出来事として設定されている。神がヨブを叱り、お前の悪の結果を受け入れよと宣告することはありえない。それならばヨブもまた、神の前にある者として言い続ける。それこそが神に対する誠実さである。偽りの告白や後悔は何の意味もないのだから。人が災難と向き合うこと、絶望と向き合うことについて、この書は強固な土台があることを指し示している。

ヨブ記 27:13-23

ヨブは、悪事に対して神の厳しい取り扱があることを知っている。悪が放置されるべきではないことも、ごまかしやお目ごぼしを、ヨブは望んでいないし、肯定もしていない。ヨブはまづすぐである。しかしその

ように語るこの言葉は、ヨブの確信も指し示している。悪は罰されるべき。だが、自分が今受けている害悪は、自分の行動に対する罰ではない。こは混同しやすい。悪は罰を受け、災難が生じる。でも、災難は悪の存在を立証するものではない。そうではない。その扱いを間違えてはならないのだ。

ヨブ記 28:1-11

ヨブの言葉、少し落ち着いた様子になつていくようだ。感情を爆発させる言葉だけを書き綴つても、人々に届くものではないと、著者は考えたのだろうか。鉱山の話がなされているのは、人は貴重なものを手に入れる力、能力を持ち合わせているのだということ告げるものだ。隠されているもの、地の奥深くにしまひ込まれているものであつても、人はそれを見つけたし、手に入れることができている。そう、人はそうやつて大事なものを獲得してきているのだ。ただし、という話が続くのだが、つまりは、単なる絶望や落胆ではなく、きちんと事態を静かに見る心も伴いつつ、この事態に向き合つていくことになる。人に与えられる必要能力は、神が与えられたものだ。ただ落胆、絶望だけに彩られる必要性はない。きちんとそれを認識した上でこそ、何がわからないのか、何を悟り得ないのかを見定めていくことができる。

ヨブ記 28:12-28

宝石は見出すことができる。問題なしである。人には十分な力がある。だが、知恵は手が届かない、と言ふ。一般的な知恵ではなくて、ここではやはり、『ヨブはなぜ苦しんでいるのか』ということだろう。ヨブはずつと苦しんできた。友人たちはそれぞれに思うところを語つていたけれども、それは的外れだった。間違つたものだった。これほど捜し求めているのに、それは見いだせていない。神こそが、とヨブは語る。そう、

かみにしかそれは提供できない。だから、神に尋ね求める以外には道がない。友の英知でも、この世の理解でもなく。そう言えばヨブはずつと神に尋ねていたはずだ。答えをと。またその答えは届いていない。だが、ヨブの進もうとしている道筋は正しい。それが人に見いだし得る答えである。ことを、この書は語る。

ヨブ記 29:1-25

ヨブ記は、不条理に思える苦難に直面したとき、答えはどこにあるのかを問うために作られた書である。けれど、この書はその答えを教育する方式で書き記されてはいない。読者は冒頭に明示されているように、この苦難がヨブに責任がないことを知っている。だが同時に、そのことを知らないヨブの苦悩に寄り添うようにして読み進めることが意図されている。だから、88章のように答えを見出しかけている言葉が語られた直後に、この88章のように再び混乱に陥る様子が語られる。論理的ではないし、推奨される姿ではないが、でもこれがまさに人間の現実である。だからヨブ記は人々を翻弄し、困惑させる。ヨブ自身がそうであり、私たちもまた不条理な事態に陥った場合にはそうなることを避けられないように、この書は私たちを激しく揺さぶっていく。その状況を踏まえつつ、やがて、神の支配にたどり着いていく。

ヨブ記 29:28

この章は、二つのことを指し示している。一つは、今とは違う、平穏だった日々を思い返し、その幸いを懐かしがる心である。ヨブが思い描く事柄を一つ一つ確かめる必要性はないだろう。ヨブはその頃に満足している。いや、その当時は手にしていた幸いの大ききには気づいていなくて、当たり前のこととして受け止めていたのかも知れない。ヨブなので、それを自分の力とは思っていない。神からの賜物である。

とは十分に理解し、神への感謝も忘れなかつただろう。それでも、彼は今すでに失われてしまった(と彼波思っている)その平安を懐かしがっている。これは健全な思いである。後ろ向きとか、そんなふうに見える必要はない。人は誰でも、そうやって良き状態を思い返す権利があり、そのことが慰めをもたらすことは大いに期待できる。

ヨブ記 29:15-20

ヨブは語る。あの頃はどれほど良かったかと。それはつまり今はどれほど悲惨であるか、といううめきの裏返しである。ヨブの思いは率直なもので、それゆえにまっとうなものだ。そしてまた、ヨブはかつての状態が神からの賜物であることも忘れてはいない。ただ、そうであるからこそ、こうやって思い返す時には悟るべきことがある。それは、神は今も同じように一切を支配しておられ、私たちに祝福を備えてくださる方である、ということだ。今は間違いなく苦境であり、それをごまかす必要はない。でも、神の支配は今でも働いているし、神の心は何も変わっていない。そしてまた、この事態はヨブに対する神からの罰でもない。だとしたら、神の祝福はかつてと同様に、今、この瞬間にも存在し得る。存在している。それが具体的にどのよう働くのかについては人の理解は届いていないのだが、でも、神ご自身とその御心、その力は永遠に変わることはない。そうか、この苦境の中にあつても、それでもなお、神はそこで生きて働いておられる、ということに、思いが動いていくように、ヨブ記は読者を誘っている。

ヨブ記 29:21-25

人々からの評価、評判というものは、その人をどれほど励まし、支えているのかと考えさせられる。ヨブが思い出す良き時代というのは豊かなときとか、健康なときではなくて、人々が自分を認めてくれてい

る時のことだ。言い換えれば、財が奪われ、不自由があつたとしても、もしも人々から受け止められ、尊重されていくならば、それは人に命をもたらす、勇気をもたらす。それなのに友人たち、そして大半の者たちは、苦境にある人を見つけると、何かが悪かつたのだと糾弾し、悔い改めよと叫ぶ。それは聖書の語る神の支配とは別のものだ。ヨブ記は、人が必要としているもの、神がもたらそうとしているのは、そういうさばきではなく、まさに命であり、力であることを告げていく。

ヨブ記 30:1-8

ヨブの言い方を差別的だと批判することはできるだろう。その人々のことを見下している、と言われても当然の言い方でもある。ただ、この世の現実としては、名もない者たちと言われるような人々が、実はそのほうが大半であることは事実だ。全ての人は平等、であるべきだが、実態としてはそうではなくて、だからこそ、単純な平等だけでは成り立たないのが世界の実情。それとも、病気の人も壮健な人も、同じ重さの荷物を背負って歩くべき、と言うのか。それはありえない。言葉や表現だけ、さも公平そうに語つたとしても、それだけでは意味がない。聖書の表現が時々きつく感じられるのは、時代が違つて言うことよりも、この世界が抱えている現実を率直に見ているからだと言ふべきではないか。

ヨブ記 30:9-15

ヨブはかつて人々を助けていた。だが今は人々がヨブを嘲る。何か彼らが立派になつたからではない。ヨブが彼らよりもつらい状況に陥つているからだ。そう、人の態度はそういうふうにして変わる。自分が向上したからではなく、相手のしくじつたり、落ちたときにこそ、多くの人は誇らしそうな態度を取る。それはヨブを傷つけている。苦しみを増

している。彼らに負けたということではなくて、世の中には結局、人々を思いやる心が見当たらないからだ。ヨブが大いに支援し続けてきたのは、ほかにそういうことをする人たちが滅多に見当たらないからだ。ヨブは苦しんでいるが、その苦しみを何倍にも増幅しているのが、人々の姿でもある。

ヨブ記 30:16-23

しかし、ヨブの苦しみの一番の理由は、人々がどうかではない。神からの答えがないこと、神の関与が見いだせずにいることだ。御子も十字架で、父よ、なぜとうめいたが、神との関わり状況こそが、人にとつて一番の苦悩となる。だが、そのことに気づかないままに、人は自分のほうから髪との関わりを投げ捨て、放棄し、そんなものは不要だと叫ぶ。何も分かつていないのだ。

ヨブ記 30:24-31

神からの答えがないことに、ヨブはうめいている。彼は言う。人だつて、かわいそうな状態の人を見たら手を貸そうとするのに、と。神を非難しているようにも見えるが、それほどに欲しているのだということ意識しながら読むのが妥当だ。と同時に、この言葉、友人たちの態度に対する指摘にも聞こえてくる。彼らは、いや、しばしば人は、つらい思いをしている人を顧みるのではなく、傷口に塩を塗ることをする。正しさという看板を掲げながら、である。そして、ヨブ記としては、これが後の神からの言葉につながるのだと言える。そう、神は確かに答えてくださる。まだそれが、ない、というふうには思ふことはあるのだが、それでも必ず、と。

ヨブ記 31:1-40

ヨブの語る最後の訴えは、自分はこのような苦しみを神から投げつけられるようなことはした覚えがない、というものだ。この場合、全ての人は罪人であり、ということを持ち出すのは妥当ではない。ヨブ記が扱っているのは、人々の認識する中での歩みの話だ。様々な課題があるのは当然で、ヨブの主張も常に正しいわけではない。だが、人が取り組み得るのは完全さではない。それはありえない。でもそれならいい加減で良いということではなく、人は自分の認識できる限りにおいては、誠実さを求めて歩むべき存在であるのだ。全ての人には罪がある、という話題は、自らの救いのために何もなしえない人間の限界を超えて神が救いを恵みとして与えられたことを語る際のものだ。だから、ここにあるヨブの言葉を不遜だとか、思い上がりだとするのは、友人たちの言葉同様に、ヨブ記の語る所に反している。

ヨブ記 31:1-40

それにしても、このように言うことが出来たヨブという人の歩みは、まさに正しい人であつたのだと思う。精一杯誠実に歩んできたのだと言いつける自覚は、なかなか見いだせるものではない。ただしそれは決して、自分を完全だと認識しているという意味ではない。様々に不十分さがあるのは、何より本人がよく分かっている。それでも、精一杯歩んできている、それを神も分かってくださっているはずだという自覚、自信と言うよりもそれは安堵か、信頼か。それがなければ、人はどうして歩み進むことが出来ない。自己嫌悪や、自分を責め続けるのでは人は歩み得ない。神はそういう姿を意図されているのではない。神の支えの中で精一杯歩んでいることを、神からの恵みとして受け止めていくことは、命与えられて生きている者としては、とても重要なことでもある。

ヨブ記 31:1-40

この言葉を読みながら思う。私たち自身は神の前に、どんな思いで日々歩んでいるのかと。自分のためさをただ否定し、批判し続けて、こんな者は生きる価値がないと言いつけていくのか。それとも、私は立派だから神の助けなどいらぬと言いつけるのか。いや、人が神の前に歩むとは、むしろ、与えられているのちを幸いと思いつ、神が生かしてくださっている現実の中にこそ、自らの存在意義を認め、だから神に感謝しつつ歩んでいくことにあるのではないか。ヨブはそういう人であり、だからこそ、これだけの苦境に陥つてもなお、彼は自らの存在の意義を否定はしないし、神の顧みが注がれないはずはないと確信している。それは健全なる肯定主義、真の意味での楽観主義であろうと思う。

ヨブ記 31:1-40

改めて考えるのだが、友人たちの言葉は、苦難があるなら何かの原因があるはずだ、というものだ。でも冒頭からヨブ記はそれを否定している。そこには神とサタンとの駆け引きの結果としてのヨブの苦しみ、という設定にしている。実際にはそんなことはありえないのだが、神は決してこのようなことはしないのだが、それほど荒唐無稽な設定にすることで、この苦難は方に一つもヨブの行いが理由ではないことが明示されていた。そう、苦難はその人の罪が原因、という論理を、ヨブ記は否定する。罪の結果としての罰はあるが、苦難の理由としての罪という概念は否定されている。友人たちのように、人はどうしてもこの論理に縛られている。そして苦悩はますます深くなっている。それは違うのだと、神は強く訴えておられるのだ。

ヨブ記 31:1-40

ヨブが様々に語っていることを一つずつ咀嚼しようかとも思つたが、やめておく。それはこの書の読み方としてはふさわしくないとと思う。ただ、ここに挙げられていることは、人が陥りやすい愚行であり、神からの叱責を受けても当然のこと、という扱いはある。だから、ヨブ記のテーマからは外れるけれど、これは人が健全に歩んでいこうとする時の指標としては大いに有効だ。誠実な歩みとは何か、ということを具体的に考えようとするなら、この箇所を提示して、これらのことについて、自分は、あるいはこの社会はどうだろうか、と問うのは有益なことである。ヨブが自信を持つて、私はこんな生き方はしなかつた、と言つているように、これは理想論ではなく、努力目標でもなく、社会としてもきちんとそれを具体的に目指すべきものと、そのように受け止めたいものである。

ヨブ記 32:1-5

エリフという人をどう見るのかは、意見が分かれている。彼の言ひ分は的確だと評価して、エリフは友人たちの主張を軌道修正してヨブの課題を指摘しているのだ、と見る意見もある。ただ、エリフは三人がヨブに対抗できなかったことに怒つていることからすると、基本的には三人と同じ立場とすることになる。そしてそれは、この書が冒頭から言つている、一連の苦難はヨブに責任はないのに、人はそれをヨブの責任にしている、という話に抵触するものだ。となると、エリフの主張はやはり、神の御心には沿わないものと言わざるをえない。それに、エリフの後、ヨブは何も言わないうちに神が発言して、それまでの論理を押しつけられる。エリフを肯定する内容でもない。やはり読み手としては、エリフもまた、という認識を持つべきだろう。

ヨブ記 32:1-5

ただ、三人と同じ論理なら、なぜ、改めてエリフを登場させたのか、という疑問は生ずる。もう十分に、人の抱える愚かさは語り示されてきたはずだろうに、とも。そのことは、彼の言葉を読み進む中で確かめてみよう。なお、⁴節や⁹節のことはエリフが謙遜な態度を持つていたという評価につながるようだが、どうだろうか、むしろそれは慙懃無礼の類に属するものではないか。彼の中に、真の謙遜、つまり相手を尊重する思いがあるようには見えない。彼もまた、ヨブの訴えを真剣に受け止めてはいない。もしそれがあるなら、ヨブを責めるよりも、彼と一緒になつて神に訴え、どうか助けてくださいと願うか、または、道を指し示してくださいと願うべきだつたらうが。人はそういうふうにはしないのだ、という実例がここにも示されている。

ヨブ記 32:6-14

エリフの怒りは、まず友人たちに向けられている。彼らの取り組みが不十分であつたと言ふのだ。これまでの論議において、彼らはヨブに対して適切な語り得ていなかったのだと。改めて言うところ、これは巧妙に組み立てられた設定の中の会話劇のようなものだから、この三人の言葉は、こういうことを言う人がいた、という話ではなく、人類社会全般において見られる意見を集約するものとして語らせているものだ。だから、それらの言葉が不十分だとするのなら、それはつまり、人類がこれまで抱えてきた観念、苦しみに関する理念は不適切だという指摘になる。ここまでヨブ記を読んできた者たちはそのことに気づき始めているので、エリフの言葉を聞いて、ようやくこれから、真にふさわしい言葉が語られていくのだな、と期待することだろう。そうであるとするなら、大いに喜ばしいことだ。でも、どうもエリフの姿勢はそうではない。より良いものと言いつつ、結局彼もまた自分の勝手な思いを語るのみ、そういう印象が拭えない。

ヨブ記 32:15-22

ここに語られていることからすれば、ようするにエリフは、誰にも遠慮せず、自分の言いたいことを語るのだ、語りたいのだと主張しているということがある。それ自体は悪いことではない。語るべきこと、必要なことがありながら、それを曖昧に済ませるのは本人のためにもならないし、周囲全体にとっても良くない。ただ、示されている様子はどうも疑問が残る。彼は自分ならば正しいことを語れると言う。それが真実なら大いに結構だ。でも、それではヨブの苦悩が無視されているという事態の打開は何もない。あれだけヨブがうめいて、そして答えが見いだせずに悩んでいたのに、なぜエリフは自分ならできると言うのか。思えば、上がり、という話だけでなく、エリフの言葉には、彼らが今直面していることの難しさを真剣に受け止めている様子が見えない。

ヨブ記 33:1-11

ここからヨブに対する言葉が怒濤のように出てくる。33章まで、ヨブの直前の言葉よりは短いけれど、友人たちとは比べものにならないほどである。そして 33:14 ではヨブからの返答を期待するようなことを言っていたが、一切ヨブの言葉を聞く耳を持っていない。それは友人たち以上に、ヨブの思いを無視した言葉だと言わざるを得まい。彼の言葉は、一つのことだけを取り上げれば「正しい」かもしれないが、今までの話からしても、これがヨブに届くとは思えず、苦しむ人々に届くとも思えず、そして、事態の解決につながる様子もない。むなしさを思うのだ。

ヨブ記 33:9-11

エリフの言い分は間違っている。単語としては、こういう言葉をヨブは

吐いたかもしれない。だが、その意味は明らかに違っていた。ヨブは、自分が正しいのにひどい目に遭っている、神は間違っている、と言っているのではない。友人たちが罪の結果としての苦しみのだと主張したことに對して、思い当たることが見いだせないと言ひ、神はどの罪に對する報いとしてこのような事態を引き起こされたのか、それがわからなうと言つて苦しんでいるのだ。正しい自分は祝福されて当然、ではなくて、これが自分のしたことの報いなら、そのことを明らかに示して欲しいと訴えている。この違いに気づかないのだとしたら、エリフには苦しむ人に対して語る資格はない。

ヨブ記 33:9-11

この書で繰り返されてきたテーマだが、人が苦しむとき、それはその人の罪に對する神からの罰なのかどうか。もしそうなら、神は明確にそのことを告げる。これが聖書に見られる神のなさり方だ。苦しめておいて、自分の胸に手を当てて考えてみる、とはおつしやらない。まず、罪の指摘があり、叱責があり、悔い改めの呼びかけがあり、その上での刑罰である。ヨブの場合、この方程式は全く存在しない。当たり前でもある。この苦しみは神とサタンとの会話の中から出てきたもの。そういうありえない設定にすることで、ヨブの罪の結果ではないことを冒頭から語り続けている。だからヨブの苦悩は当然で、彼の罪を指摘する人々の言葉は空しいものとなっている。人間には確かに罪がある。だが、罪の結果としての苦しみではない場合が多々あることを、ヨブ記は世界に對して明言しているのだ。

ヨブ記 33:12-18

自分の言葉に對して、神が自分の思ふような形で答えてくださらないことに不満を抱えるのは間違っている、というエリフの指摘は、まっ

とうな指摘ではある。私たちは、この点で、神を自動販売機か何かのように扱ってはならない。自動販売機は、適切なボタンを押せば、その通りの答えを提示する。しないとすれば壊れている、のだ。でも同時に、神に向かって訴え、答えを求めて叫ぶことを、神は決して禁じてはおられないし、拒んでもおられない。人の望むままに答えるとは限らないが(それは神ご自身の判断次第だ)、でも、訴えてはいけないとは告げられていない。その点についての叱責は、聖書の中に見られないはずである。神に対する不遜な態度と、神に切に呼びかけることのできる関係性と、この二つの違いを認識する必要があると、エリフの言葉を見ると痛感させられる。

ヨブ記 33:19-33

エリフは、神を単なる処罰者として考えているわけではないようだ。仲介者によつて誠実さが語られるならば、罪ある者であつたとしても神から赦しが与えられ、回復が与えられるのだということが語られている。そこにある誠実さとは、話の流れからすれば、清く正しい人という意味ではなくて、自ら神の前に罪を認めてひれ伏す者、ということだろう。つまりは潔く悔い改めるならば、ということになる。これは、罪の結果は死である、で終わりにしてしまふのとは違つて、神にある希望を語り、神の意図されることを語るものではある。論理としては正しい。ただ、ヨブの抱えている問題は、何を悔い改めれば良いのかわからない、という事態だ。そのことを悟れないままに、とりあえずごめんなきさい、というのは誠実な態度とは言えない。エリフの言葉は友人たちよりも精密ではあるが、でも、ヨブの苦しみにとつては答えになつていない。そしてヨブ記は冒頭から、ヨブに対して悔い改めの必要があるとは告げておらず、そういう設定は存在しないのだ。

ヨブ記 34:1-6

エリフの言葉は長い、長すぎる。でもそれは、人がこねくり回している愚かな論議があきれるほどに長いことを思い出させる。エリフもまた、ヨブは悪事を働いたので苦しんでいるのだ、という「結論」をすでに持っている。ヨブは「なぜ」と問うのだが、エリフは「悪いことをしたから苦しんでいるのだ」と言い張っている。回復の道は示そうとしているが、前提は同じ。そしてヨブ記はエリフの言う前提を否定している、彼のよきな指摘は、どれほど回復を意図していたとしても、意義を持ち得ない。私たちは考えておかねばならないのだ。悪事がなくても苦しむことはあるのだ、ということである。

ヨブ記 34:10-15

エリフの言うことはその通りで、神は悪を行わない。でも同時にヨブ記は繰り返して告げている。その人に悪があるかどうかとは関係なく悲惨な出来事は起こりえるのだ、と。これが人にはわからない。エリフも、そしてヨブも、である。苦しい出来事が起こつたら、それは害悪であり、当然にそれを引き起こした原因があるはずで、その害悪は除去される必要があるのだ、と思ひ込んでいるからだ。最も身近な例は、死であるかとも思う。罪の結果としての死であり、しかし神はこのことについてはすべての人についてこの事態を除去しない。悔い改めてもどのように生きたとしても、である。死を避けられるようにと訴えるのは当然、でも同時に、神のなさっていることは死を排除することではなくて、死を乗り換えた新しいものを与えてくださること。だからそれでもいい、ということではない。私たちはこれからも訴え続けるだろう。でも、死の除去だけが幸いではないこともまた、意識しておく方が望ましい。

ヨブ記 42:13-15

ただ、そうなるに、ヨブにとつて、これは真の回復かどうか。財産は、同じだけ、あるいは倍が戻ってきたら、それは回復と言えるだろう。でも子どもたちは、先の子どもたちはもういないのだ。生き返ったのではない。新たな子どもたちである。そのこと自体は幸い、でも、失った子どもたちについての悲しみは、消えてなくなるわけではない。だから、この回復を持つてヨブを幸いな人と言うのはためらいがある。人の世には様々な課題があり、苦しみがある。解決が与えられること、回復が与えられること、神の祝福が満ちることを切に願う。でも、痛みや傷、悲しみの記憶は消えてなくなるわけではない。神はもちろんそのことをご存じであるし、そして人間同士もまた、そのことを思いやる者でありたい。この世にある限り、人の痛みは完全に消えることはない。厳しい事態、尾を引く事態はある。だからこそ、神の助けを求め続けるものでありたい。

ヨブ記 34:16-30

この箇所のエリフの言葉は、二つの面から考えるべきだろう。一つは、人は神に対して文句を言う筋合いではない、と言っていることについてである。神はまつすぐに事をなされるので、その御業の結果について、人は疑義を差し挟む必要がないというのは事実だ。そして神は一切をご存じなので、人間のなす裁判のように、果たして何が真実かを慎重に見定める必要性もない。そういう意味では審議は行う必要がない。人間社会の裁判が公開されるのは、それが絶対確定ではないからだ。だからこそ衆人環視の中で検証され、そして、真実を見極める努力を積み重ねた上での判決になる。神にはそれが不要だし、人もまた信用できない相手のように神を扱うのは適切ではない。この箇所が言うのは、神は好きないように物事を定める権限があると言っている

のではなくて、神の決定は確定だからこそ、検証の必要はない、という意味である。

ヨブ記 34:16-30

しかし、同時にこの箇所で語られていることは、あまりにも一面的過ぎる。人が裁判と公開された審理を求めるのは、その結果に疑義があるからだけではない。自らに対する判決がどのようなものであるかを知り、理解し、真剣に考え、受け止めていくためでもある。だから、どれほど正しい処罰だとしても、人はその理由を尋ね求める必要性があり、そしてもちろん神はそれに応じてくださる。ヨブが願ってきたのは、自分の行為の結果としての苦しみならばどうかその罪を指摘して欲しい、ということである。それが分かれば悔い改めもできる、謝罪もできる。でもそれがわからないので彼は苦しみ続けている。ヨブのこの求めを、エリフの言い方では一刀両断、そんなものは必要がないとしてしまっている。正義がなされているという点ではその通りだが、でも、神の御業に対してヨブはこのままでは何も応答が出来ない。そして聖書を見る限り、神は確かに、人に対しては明確な罪の指摘をなさる。単なる処罰ではなく、その罪についての宣告をした上での対処である。神はそれをなさる。エリフは論理的にその必要性はないと言うけれど、それはこういう苦しみの全体像を見ていない。彼の言うままでは、人は何もすることができなくなってしまう。神はそれを望んではない。

ヨブ記 34:16-30

この箇所ではエリフが言っていることには、もう一つの意味合いがあるようだ。つまり、彼は権力者たちを信用していない。それで、彼らに弁解やごまかしの機会を与えるのはよろしくない、と。そのような逃げの

機会を与えずに、神は事を正しく対処なさるのだというように。人間社会のあり方としては、この観念は分かる。ただ、神ご自身について言えば、権力者がどれほど逃げ口上を並べたとしても、そんなものに惑わされる方ではない。千でも万でも、好きなだけ語らせればいい。神は真実をなさるだけである。エリフの危惧は人間の裁判官には必要だろうが、神には不要だ。彼はそのことを取り違えて語っている。論理としては全うでもあるが、でもそれは神のなさることではない。それに、ヨブは権力者ではない。彼の指摘は的外ししている。ヨブは人々を支配したり、罵にかけたりはしていないのだから。正しさというものについて、よくよく考える必要がある。

ヨブ記 34:31-37

エリフの言葉は、彼が正しいことを言っているのか、それとも間違えているのか、どちらかであるのかによつて、受け止め方は大きく違つてくるのだと思う。ただ、この箇所について言えば、エリフが正しいと見るならば、その意味を理解するのが非常に困難である。ヨブが神に対して、自分の罪を教えてください、と願っているのなら、それは非難されるべきことではない。自分は悪くないぞと言ひ張るためにこういう台詞を吐いたというのなら別だが、でも、ヨブにはそんな様子は何も見えていない。良識のある人々、という話も、これはヨブの言葉を全く聞いていない物言いではない。ヨブが間違っているからこういう苦しみがあるのだ、ということが大前提になつてしまつていて（それは間違いだというのがヨブ記の設定である）、だとすればヨブの言い分は全て悪だという、そういう話になつてしまつている。ヨブもたたくさんの課題を抱えているのは当然だが、ヨブ記においては、彼の姿勢は基本的に認められていく。でも人は、この社会は、それを受け入れようとしていない。耳を傾けようとしていない。

ヨブ記 35:1-8

神はこの世界を造られた方である。つまり、神はこの世界に依存していない。この世界が、あるいい人々がどうであつても、そのことが神に存在に影響は与えない。良く生きようが、悪に生きようが、それで神に益をもたらすわけでも、損失をもたらすわけでもない。その点では、エリフの言うことは事実である。だが同時に、神は人の状態について思いを傾け、それを喜び、あるいはそれを悲しまれる。心を沸き立たせられるし、その心に傷を負われる。神は決して超然としているわけではない。それに、¹⁰節の言い方は、ヨブの言葉ではない。ヨブはもつとまっすぐに神を求めているに過ぎない。神の答えを切望しているのだ。エリフは、神を崇高とする意図だろうが、でも、ヨブの、いや、人の希望を切り捨ててしまつている。

ヨブ記 35:9-16

¹⁰⁻¹¹節の言葉が人の間に見られないのは事実で、それは問われるべきことだ。人は自分の願ひばかりを語り、神を知り、神を崇め、神をほめたたえることを忘れていく。でも、それなら神は人々の呼びかけを無視されるのか。いいや、そうではない。神は不信仰な者の言葉などは聞き流すのか。いいや、そうではない。神を待て、とエリフは言う。その通りだ。でもエリフ自身が、神を待つよりも先に、自分たちで自分たちを断罪し、神は関わつてはくたさらないと言つている。エリフは厳しく人に向き合つている。それはすごいことだが、でも彼は結局、神の御心を知らない。慈しみ深い神を知らない。知らないのか、知ろうとしていないのか。世の中にはどちらもありそうだが、ともかくそこには、ヨブの切なる思いに対する答えはなく、神の御心も見出せはしない。

ヨブ記 36:1-4

謙虚な姿勢を示していたはずだが、どうもエリフの本心は、自分こそが真実を知っているのだという確信だったようだ。しかも、その言葉の根柢がない。ヨブの言い分をちゃんと聞いてはいないし、神のなさっている事、語られていることに耳を傾けている様子もない。彼が持っている真実は、人の脳裏に浮かんでいる論理である。神を知らなければエリフの言い分は的確にも見える。実にまっすぐに見える。でも、実際の神はそのようにはなさっていないし、そのように語ってもいい。彼の確信は、人の思いに過ぎない。それが、神が啓示を重視される理由でもある。人が自らの理念によつて尋ね求めても、そこには真の答えはない。神が示して下さつて、それで初めて、人は見出すのだ。エリフを見て思う。人はどれほど頑張つてみても、自分たち自身では、福音という答えを手にはできないのだな、と。

ヨブ記 36:5-12

エリフは間違つたことを語っているわけではない。ただ、これがすべてなら、神とはつまり、単なる論理であり、法則である。善には善で報い、悪には厳しい処置をなさる。もちろんその通りだが、でもそれがすべてではない。ヨブの苦しみは彼の悪の結果ではないことを、ヨブ記は明確に示してから、この会話を提示している。そう、冒頭から、エリフの論理は否定されているのだ。私たちはエリフの言う論理も、もちろん知らねばならないし、自らに言い聞かせねばならない。でも同時に、それを越えた神の慈しみがあることを、私たちは知らねばならない。神はそれを示そうとなさっている。この書の存在自体が、そういう神の呼びかけである。

ヨブ記 36:13-21

エリフは苦悩している人を虐げるつもりはないようだ。この世には、善に生きてもなお、虐げられる人がいることを、彼は認めている。そして、そういう人々に対して、神の助けがあることも語っている。その理解は大切だ。ただ、どうやらエリフがそういう対象として認めるのは、明らかに悪意に満ちた相手がか弱き者を虐げている場合、のようだ。だから、ヨブのように災害や、病氣や、そういうものによつて苦しんでいる場合には、このかわいそうな人たちの中には入つてこない。この世界自体が、そんなに単純ではなく、善悪で簡単に切り分けられるものではないのに。エリフの扱い方は、事態をますます混乱させるばかりである。

ヨブ記 36:17-21

エリフは、ヨブのようにもともとは力を持つていた人、裕福だった人に対して、非常に厳しい。ヤコブ書には、貧富によつて扱いを変えてはならないのだと語られているが、エリフの態度も、ヤコブが言うのとは逆であるけれど、でも同じだ。その人の経済状態、身分などによつて、その扱いが根本的に方向付けられてしまっている。それは違う。すべての人は神の前に平等なのだ。とすれば、叱責も含めて、あるいは苦しんでいる時の扱われ方も含めて、それは同じであるべきものである。エリフのような扱い方はよくある。だがそれは、神がすべての人の神であること、一切を超えておられる方であることを否定するものとなつてしまふ。

ヨブ記 36:22-33

その通りである。語られている通りである。神こそが一切の答えをお持ちで、人はしばしばそれを間違えている。だから人は、神にこそ聞かねばならないのだ。その言葉は、エリフ自身に対して言われるべき者だ。ヨブはわかっている。いや、苦悩しているので、彼を励ますために、このこ

とは繰り返し語つて聞かせる必要があるだろう。叱責ではなく、慰めとして、である。これはエリフの本心なのだろうか。ここまでの彼の言い分からすると、わかっているように見える。ヨブを叱責するための言葉のように見える。でも、エリフ自身もそのことに気づくなら、彼は幸いを手にすることができるのだが。

ヨブ記 37:1-24

この言葉をエリフに語らせている著者は、ここまでの論議を書き終えようとして、つまり、人間たちの様々な思惑を思いつく限り並べていく中で、神の偉大さに圧倒される思いに至っているようである。様々な論議があり得るけれど、でも結局のところ、神の前に立ち、神に聞くしかないのだ。エリフ自身の語ってきたことの整合性がとれないように思うのだが、ヨブ記だからそれはそれでも構わない。著者自身の切なる思いであり、そしてだからこの後に、神からの呼びかけが力強く語られていく。

ヨブ記 37:24-24

どうなのだろう。神にこそ聞けと語らせて、でも同時に、ここまで主張してきたエリフの一貫性を意識したのだろうか。神に聞くこととするよりも前に、まずは自分たちの論理に基づいてさばいていこうとする感覚が、まだまだここには残っているようだ。イエスご自身も、他人をさばくなど語られていたが、このことが、人には非常に根深くあるのだと言っていることを痛感する。相手の言うこと、やることに對して否定的なことを語るなどという意味ではない。それはただの放置であり、無責任である。私たちは人間として完全ではあり得ない。だからこそ、相手の言うことには真剣に耳を傾け、そして、神の語られている事、なさっていることをしっかりと見続け、その上でこそ語るのだ。時には反対意見

も含めて。その覚悟、意識が伴っていないければ、ただの強弁と何も違くない。

ヨブ記 38:1-7

いよいよ、神からの答えが語られていく。ヨブ記を、人が苦境の中で思い悩む姿を描いているものと見なすなら、神からの答えはいらない、という感想も出てきそうではある。もともとヨブの苦境に関する冒頭の部分はヨブたちには秘されているのだから、このように答えなくても構わない、とは言えるだろう。人類全体の現実としては、何の答えもないままに、それをどう見て、どう受け止めるのかが問われているのだから、こういった形での応答がなくても良いとは言える。実際、神はほとんどの場合、こんな形でお答えにはならないのだから。ヨブ記の著者はそんなことはわかっているはずだ。それでもなお、こうして神からの答えを書き記す。それはやはり神が、人々に對して語りたいた方、啓示を与えたい方であるからこそ、であろう。これを読む者たちは、自分にも同じような答えがあると期待するのではなく、この答えの中に、神の究極の、すべてに當てはまる答えを知っていくのが有用だ。

ヨブ記 38:2

神が叱責している相手は誰か。ヨブだとすれば、これまでのヨブの言葉に問題あり、という意味になる。だが、見てきたように、ヨブの語ることに決定的な課題があったとは思われない。それに、この言い方からすると、神はエリフを黙らせて、ヨブとまっすぐに向き合いたいとされているのだと読むのがふさわしいだろう。そう、エリフの言葉は、そして友人たちの言葉は、ヨブの事態に對して、あるいは神を知る上で、適切ではなかったのだ。もつとも神は、彼らに對してあれこれと言つてはいない。ここからの言葉はひたすらにヨブに對してのものだ。苦悩しているヨブ

ヨブ記 38-39

ということなので、38-39章を、静かに心を整えて読むと良い。それは苦境の中で混乱し、打ちひしがれている心に、大切な力をもたらしてくれるだろう。そう、人にはどうにもならないけれど、そこには神がおられる。一切を支配しておられる神がおられる。おられるのだぞと、何度も、何度も、そのことが語られていく。人の手が届かないことはたくさんある。でも、神はその一切を凌駕しておられる。だから、どうすることもできない事態の中で、人は神にこそ寄り頼むべきなのだ。それこそ、ヨブにこそ見られなかったことでもある。

ヨブ記 40:1-14

ヨブはいったん、神の前に降伏している。だが神は、というよりも、ここまで読んできた人々にとつては、まだこれで終わりにしない方がいい。さらにたたみかけるようにして、神の圧倒的な權威、信頼できる確かさを示し続けた方が良い。そういうわけで、神の言葉はまだ続く。基本は同じである。人にはどうにもできない、神は何でもできる、だから神にこそ、と。ヨブに関して言えば、彼は決して間違ったことは言っていない。思いついたとも思えない。ただ、言うならば、彼は言わなかったのだ。思い浮かべなかったのだ。言葉を発しなかったのだ。神に対して、助けを求める言葉を、思いを、である。それは別段邪悪でも何でもない。ただ、それしか答えがないことを、こういう苦境にあるからこそおわさら、本人のために、ぜひとも気づいて欲しい、知ってほしい。それがヨブ記の願いでもある。

ヨブ記 38-41

しかし、このたたみかける言葉を見るときに、人を遙かに凌駕するものは、ずいぶんたくさんあるのだと思わせられる。人はいつも、この

世界の主人は自分だと思っている。神は別格として、それ以外には負けるはずがないとも。とんでもない思い上がりである。人が太刀打ちできないものはこんなにたくさんある。しかも人を越えている意味合いも。私たちは神から与えられた様々な良き、価値あるものを持っている。でも、知っておくべきなのだ。人はやはり、とても小さな者に過ぎないのだということ。原因がわかれば何とかできる、そんなことはない。何かがわかつて、それでも人はやはり、手の出しようもなく、うろめくだけであるのだ。

ヨブ記 42:1-6

神はとても長く語られた。けれど、そこにはヨブの悩みに対する直接の答えはなかった。なぜ、自分もこんなにも苦しんでいるのか。ヨブは思っていた。それが分かれば、何とか対処も出来るのだが、と。友人たちは言っていた。ヨブの悪がこの事態を引き起こしたのだと。だから、神の前に謝罪するか、あるいは、この苦しみを黙って受け止めるしかないのだと。ヨブは、自分の罪が原因であるのなら率直にそれを認めることをためらったりはしない。ただ、具体的には思い浮かばない。だからそれを示せと求めている。人々の論議は、苦しみと罪との関係に終始していた。けれど、神はその論議を蹴飛ばして、全く別のことを語られた。そう、彼らの問いに対する直接の答えは告げられなかったのだ。

ヨブ記 42:1-6

では何が語られたのか。そこにあつたのは、ただひたすら、神は一切を支配しているということ、神の力は偉大であり、人には全く及びのつかないものであること。そこから出てくる結論は、神に任せよ、ということである。自分では解明できないかもしれない。いや、できないだろう。だ

としても、神は確かな方であるから、そして、私たちの様々な課題に関わつてくださる方だから、決して見放さない、そして一切を支配できる方だから、だから任せよ、と言う。この世界に様々な、人には把握できない課題がある。説明できるのだつたら、それは幸いだ。でも、できないことは多々ある。神は答えを示すのではなくて、ご自身が事を背負うという形で決着をつけることがとても多い。それが人にとっての幸いに至るからこそである。

ヨブ記 42:1-6

神のこのような答え、解決について、不満を抱く人はあると思う。結果的に良かったらそれでいいとは言えないぞ、と。人はやはり、答えを知らなければ、理解が出来なければ、決して幸せにはなり得ないのだ。その気持ちは分かる。でも、そういう主張はつまり、人が絶対的な権威を持つているという認識が前提だ。もし、人には手の届かないことがあつても、必要なことは一杯あるのだと認めるのなら、理解することよりも、信頼できる方を得ていることを最善と考えるだろう。そうだな、料理を味わうときに、食材と調理方法を全て把握できないと楽しめないと考ええるのか、それとも、知識も理解もなくても、味覚が楽しんでくれていれば、それが一番と考えるのか。その違いは、結構、私たちの生活、社会のあり方にも深く影響しているように思う。

ヨブ記 42:1-6

ヨブは、事態の解明ではなくて、神に委ねることが出来るのだと悟らせてもらったことで、この事態と彼の悩みについての解決を得ている。彼が悪事をしたので苦しんだのではないと明言されたわけではない。でも、神はそのことを取り沙汰していない。だとすれば、ヨブは自分の罪を、この苦しみの原因かどうかで思い悩む必要はないのだ。そしてまた、

自分の理由以外に、何が原因なのかについても、ヨブは答えを与えられてはいない。でも、神がその一切に関わつてくださっていること、神は決して見放してはおられないこと、このヨブの事態を掌握されていること、そのことを確信させられたとき、ヨブはそれで十分と受け止めた。彼が義人と言われるゆえんでもある。悪いことをしない、ということではなくて、彼は神を信じて、そしてその信仰が彼を義人としたのだ。その信仰、委ねの部分について、友人たちとの論議が結びついていない、そのことをヨブは悔い、自らの問題としても自覚し、その点をこそ彼は、神の前に謝罪している。

ヨブ記 42:7-9

三人の友人たちは、彼らの中に悪意はなかつたけれど、でも、ヨブに對して、つまりは神の御業について、間違つた論理を言い立てて、そしてヨブをさらに苦しめた。それで彼らは叱責されている。エリフはどうなのか、について、この書は何も語っていない。それはエリフを肯定しているのではないはずだ。彼は無視された、と言つても良い。その言葉は、人々の一般的な観念、悪と苦しみについての概念を上手にとりまとめたものに見えたけれども、でもそれは間違いを重ねているだけで、そして神は彼の言い分を無視された。でも、叱責はあるが、断罪ではない。神は彼らを処罰して終わりではなくて、彼らを前に進ませようとされた。それも、ヨブを用いて、である。これもまた神に関する驚きである。神は人々を顧みてくださる方なのだ。

ヨブ記 42:10-17

ヨブ記のこの箇所を邪魔だと語る人もあるそう。人の抱える苦悩を思うと、それが打開できない中でどう生きるのか、と言うことをヨブに見ようとするなら、回復は起こらない方が説得力がある、という

ことか。これを、ヨブの場合は回復したが、多くの人の場合はそうならないという、現実の違いであつて、それをどうこう言つても仕方がないと説明する人もあるが、この話の中ではずつと、ヨブ記は一定の意図に基づいて作り出された話、意図的に組み上げられた論議として扱つてきた。だから、この回復は、一連の論議にとつて必要なものなのだ。回復しなくても頑張つて生きていくことが出来る、というのはつまり、人の力で何とか乗り越えるという話だ。でもヨブ記の結論は、人の解明でも、忍耐でもなく、ひたすら神に委ねるのみ、ということだつた。だから、神の業としてのこの回復は、きちんと設置されることになる。神が一切を掌握していることの表れとして、である。

ヨブ記 42:10-17

神はヨブの財産を以前の二倍にされた。サタンとのやりとりを前提に考えると、よけいなことをしたことへの償いにも見えてくるが、そういう様子は全く感じられない。苦しんだヨブに対して、神は多くの祝福を持つて助けてくださったのだ、というところまで、である。結局、サタンとの云々をどう位置づけるのかは、全く触れられていない。あれは結局、ヨブの苦しみは彼の罪のゆえではないことを、これ以上ない形で明示するための設定だつたということだろう。だから、神のいたずらなども語られず、神がヨブに謝罪するわけでもなく、である。そして、答えはただ神に委ねることのみ、としてきたとおり、ヨブを回復させてくださるのは、ただ神ご自身のみ、であつたのだ。その点だけ強調しておけば、それで十分なのである。

ヨブ記 42:13-15

一倍のものを与えられた、という中で、子どもたちについては、同数である。ただこれは、財産と子どももの違いだ。ヨブの子どもは倍になつた。

以前の子どもたちと、それから新たに生まれた子どもたちである。財産は失つたらそれで終わりだ。でも子どもは、死んだとしても、親の心の内にあつては、それで消えてなくなりはない。その10人、そして今度の10人、ヨブの子どもは20人になつたのだ。子どもだけではないだろう。他の様々なことについても、失われたからそれでゼロ、ではなく、そのことはいつまでも心に留まり、そして、神による回復があれば、そこには以前のものの上乗せされての祝福として認識されることもあるはずだ。その感覚、その認識をヨブ記は忘れていない。

ヨブ記 42:14-15

珍しいことが書いてある。娘たちが注目されている箇所、よく扱われている箇所、である。古代の社会では、こんなふうに娘たちが扱われる例はない。ただし、イスラエルの律法の中では、それが一部、肯定されている。もつともここにあるのは、それ以上にも見えるのだが。男女格差と言う。人の世がずつと持つている状況である。けれど、神の意図の中では、そういう認識はない。神はそういう風習を無視しておられるようだ。ヨブ記は現実ではないから、これもまた、一つの理想論ではある。でもそれだけに、神の意識がよくわかる。

ヨブ記 42:16-17

ヨブの生涯は140年とされている。これは、ヨブ記の書かれた時代によつて印象は違つたろう。ただ、聖書の一巻としてこれを最初に読んだ人々を想定するなら、その時代の人々にとつての寿命はもつとずつと短く、だから、ヨブは長寿を全うしたという意味合いになる。ただし、この年令はアブラハムたち族長の時代に当てはめると、まあまあ、という感覚で、アブラハム、イサクにはどういふ及ばないという意味合いにもなる。だから、最大の祝福ではなく、かなり祝福された人の一人、

でも、同程度やそれ以上の人はまだまだいる、ということになるだろう。
ヨブを特殊な存在とはしなかった、ということである。

ヨブ記終わり

ヨブ記はここまでです。全く違う読み方をする人も多々いるのだろうな、と思いますが、でも、こういう視点がヨブ記の本来の意図には似つかわしいと、私は思っています。苦しみの問題は人類の究極の話ですが、ヨブ記とは全く違う解決法を示すものも多々あるとは思いますが、でもここにあるのは、まさに神への信仰こそ、ということであつて、それは聖書全体の方向性でもあります。さて、これでヨブ記は終わります。次はヨハネ福音書にしようと思つています。月が変わつて、10月に入つてからのスタートを予定しています。